
鋼殻のレギオス 天剣を携えし刀姫

ルオト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鋼殻のレギオス 天剣を携えし刀姫

【Nコード】

N7724Y

【作者名】

ルオト

【あらすじ】

少女はただ守りたかった。大切な人達を。大切な故郷を。

だが、その願いは、嫉妬と悪意によって閉ざされ、少女は故郷を去り、遠き異郷の地へと旅立つ。

遠き異郷の地は存亡の危機だった。少女は刀を取り、その地を守ることを決意する。

その決意が導く結果は……

プロローグ

変えたのはたくましい背中の青年だった。

少女は共に暮らす家族の中で自分だけが、特別な扱いをされるのが嫌だった。

そんな中、たまたま出会った青年が少女にこう言った。

「今は甘えとけ。それで、いつか家族にその恩を返せるように強くなって、護ってやればいい。外をうるつく化け物や心無い人間からな」

青年の言葉は少女を強くした。

本当は少女は闘う事が好きではなかった。

人は勿論、外を王者のごとく君臨する人類の天敵である汚染獣もどちらも怖かった。

だけど少女は懸命に刀を握った。

大切な人達を守りたかった。

大切な人達が暮らす都市を守りたかった。

少女は懸命に走り続け、いつの間にか都市でも最高位の武芸者の称号を得ていた。

だが……少女とは無縁のことから。嫉妬と悪意によってある事件が起き、少女は生まれ育った故郷を一時離れる事を選択する。

少女の家族は勿論、多くの人達が少女を止めたが、少女は周囲の制止を聞き入れず仮初の新天地を目指す。

「ん。もう直ぐ着くのか」

茶色の髪を腰まで伸ばした少女は放浪バスから見える都市の旗を

見て、自然と微笑を浮かべる。

その笑みは純粹な幼さと、どこか達観した大人の雰囲気混ぜ合っていた。

学園都市・ツエルニ。今日から少女の暮らす都市だ。

少女はこれから始まる新たな生活に、期待と不安が押し寄せてくる。

「六年か。長いよね。でも愚痴は言えないね。自分で選んで自分で決めた事だから」

少女は改めて自らの行動によってこの都市に来る事になった経緯を思い出すと、改めて決意する。

その日から少女レイムリア・サイハーデンの新たな生活が幕を開ける

プロローグ（後書き）

とある二時作品に影響を受け、鋼殻のレギオスの二時作品に挑戦する事にしました。

正直、原作の面白さを損なわない作品にできるか不安ですが、駄文ながらに付き合ってくれれば幸いです。

第一話 ツェニルの支配者との対談

(・・・私、どうしてこんな所にいるんだらう?)

レイムリアはひどく自分が場違いな場にいる事を認識しながら、やや緊張した面持ちで目の前に座る青年と向き合っていた。

銀色の髪に知的なメガネの青年カリアン・ロス生徒会長。

この学園都市の支配者に当たる人物だ。

レイムリアがここに呼ばれたのは、入学式での乱闘騒ぎの所為だ。敵対する都市同士の武芸者が鉢合わせになり、あわや大混乱になるのをレイムリアが問題の二人を投げ飛ばして、それを止めたのだ。

当初レイムリアはその騒ぎを静観するつもりだった。入学式そうそうに要らぬ注目を集めるつもりは無かったからだ。

だが一人の一般女子生徒が突き飛ばされるのを見て気が変わった。そして原因の生徒二人を投げ飛ばし暴動を鎮圧してしまった。

そうしてこの場に連れてこられたレイムリアだったが、何故ここに連れてこられたのか全く見当がつかなかった。

「ふむ。レイムリア・サイハーデンさん。私は君を罰しようとしているわけではないよ。むしろ君に礼を言う為にここに呼んだよ」

「そうですか。だったらもう私には用事はありませんね。それでは失礼しま」

「まあ、待ちたまえ。君については少々調べさせてもらったよ。レイムリア・サイハーデン。希望は一般教養科。奨学金はDランク。就職先は機関掃除。」

これで六年はつらいよ」

カリアンの問いは正しい。だがレイムリアにはお金が無かった。

本当は違う学科に行きたかったし、自分の時間を多く削られる就職もしたくないが、レイムリアは援助してくれるあても無く、さらに学力もとある事情であり高くない。

今の待遇こそがレイムリアにとって現状望みうる最高の環境なの

だ。

「そうですね、私の家は貧乏ですし、私自身あまり賢くもありません。これで六年頑張る以外には」

「そこで提案なんだが、武芸科に転科するつもりはないかい？それなら奨学金もAランクに上げよう」

「え！？」

カリアンからの突然の提案は、レイムリアにとっては望外の提案だった。

武芸科に転科すれば、最低限の訓練ができる。そうすれば、自己鍛錬くらいは出来る。最低限実戦の勘をある程度、落とさずに済む。さらに奨学金もAランクとなれば、機関掃除のバイトもあまりする必要も無く鍛錬に、より身を置く事が出来る。

レイムリアとしては生徒会長が提案を撤回しないうちに、即決で決めたいのが本音だが、ここまでレイムリアにとっていい話だと、逆に裏がありそうなので、一応訊ねてみる。

「あの、どうしてこんない待遇で私を武芸科に転科させてくれたんですか？私は一応一般科を希望したただの一年生ですよ？」

「そうだね、レイムリア・ヴォフシュティン・サイハーデンさん」
カリアンがその名を口にした瞬間、レイムリアの表情が消え、視線が刃のように鋭くなる。

「……私の事を『知っている』なら、この善意は何かしらの報酬という事ですか？」

「……そう、あからさまな物では無いよ。ただ君には武芸科に所属してもらって、ある事をしてもらいたいんだよ」

笑みを深めながらカリアンは、今年都市同士の戦争、都市対抗戦がある事、そしてツエル二には一敗でも敗北すれば、都市の命であるセルニウム鉱山を失う事を話した。

「なるほど、解りました。微力ながら都市存続の為に私の刃を振りわせてもらいます」

「そうか。引き受けてくれるのかい。ありがとう」

「構いません。ただ次からは妙な駆け引きや裏のある交渉は控えてください。私はその手の駆け引きが苦手です。率直に話してくれた方が、話しが速くて助かります」

「そうかい。解ったよ。次から君に頼みごとをする時は率直に協力を仰ぐ事にするよ」

「助かります。それと私の事はあまり言いふらさないでください。無用な注目は、その、好きでは、無いので……」

刃の様な鋭い視線が消え、どこか気恥ずかしそうにするレイムリア。その様子は先程までの他者を圧倒す武芸者の顔では無く、どこにでもいそうな普通の少女の顔その物だった。

あまりのギャップに思わずカリアンは苦笑した。

「解った。約束させてもらうよ。それと早速で悪いが、ひとつ君に頼みがある」

「？何でしょう」

「なに、ある小隊に所属して欲しいのだよ」

「小隊？」

カリアンは小隊について簡単に説明する。

武芸科でも優秀な者達が、チームを組み、戦争時の中核となる為の部隊だという事を説明する。

「なるほど、それで私をその、小隊に？」

「ああ。君ほどの実力者だ。末端の兵より、小隊員でいてくれた方がこちらとしても作戦を立てやすい。さらにこちらとしても援助の口実になる」

「……援助は別にいいですけど、そう言う事なら引き受けさせてもらいます。後でその小隊の人の所に行けばいいんですか？」

「いや、向こうから接触させるよ。では、これからよろしく頼むよ」
カリアンはそう言うと、右手を差し出す。レイムリアは少し躊躇ったが、その手をキツチリと握り返した。

「ふう。予想以上にうまく話がまとまったな」

レイムリアが退出した後、カリアンは予想外に話し合いがスムーズに言った事に安堵したが。

「さすが、槍殻都市・グレンダンでも最強の十二人の一人だね。少し睨まれただけで、手の震えが止まらないとは……………」

そうカリアンはレイムリアの前では平静を装っていたが、睨まれた瞬間、一瞬気絶するのではと思うほどの圧力を感じた。

そして思う彼女、レイムリア・ヴォルフシュティン・サイハーデーンという名の少女は、絶対に敵対できないと。

敵対したが最後、おそらく、ツェルニは彼女一人に滅ぼされるだろう。

現状は彼女が協力的なのが幸いして、幸先のいい関係が築ける土壌が出来た。

後は彼女に出来るだけの便宜をはかり、出来るだけこちら側にするだけだが……………」

「さて、彼女はどうすれば、こちら側に繋ぎとめられるかな」

第二話 出会い

早速武芸科の制服に着替えたレイムリアは、笑みを浮かべながら教室へと向かった。

（ん〜いい出だしね。六年も訓練が出来ないのは、キツイと思っただ矢先に思わぬ申し出があったおかげで、不安が全部解消！）

レイムリアにとってカリアンの申し出は本当にありがたかった。奨学金のアップに、訓練できる環境をくれたのだ。

レイムリアにとってそれは物凄く重要だったし、カリアンの頼みである都市を守る事も、レイムリアの信念から言えば、むしろこちらから力を貸すという内容だった。

つまりカリアンの提案はレイムリアにとっては、マイナスがホトンド無く、むしろプラスの要素が多い。

自然と笑みがこぼれてしまう。

唯一の懸念は小隊の事だ。正直な話、レイムリアは他人と共にチームを組んで戦う事がホトンド無かった。

だからチームを組んで戦う事に不安を感じるが、それも一つの経験になる。

それに、本番の試合以外の勝敗はそれほど重要ではない。

最悪、カリアンに頼んで本番の試合の時は、単独突撃を許可してもらえばいい。

つまり、レイムリアにとってはその程度の話だった。

「あ、やっぱり武芸科の人だったんだ」

栗色の髪を二つにくくった少女が嬉しげに声を上げる。

「さっきは一般教養科の制服を着ていたぞ。私は一般教養科の制服なんて持っていないぞ」

今度は長身の赤い髪の少女が不満そうに言う。

「え？あの、あなた達は？」

突然赤毛の少女に問い詰められ、困惑するレイムリア。

「あ、ああ、済まない。取り乱して。武芸科一年ナルキ・ゲニルだ」
「んで、私が、ミイフィ・ロツテン。一般教養科だよ。で、こつちに隠れてるのが……」

ミイフィがナルキの陰に隠れるようにしていた三人目を前に出す。
「メイシエン・トリンデント。この子も一般教養科ね」

と隠れていたメイシエンの代わりに、ミイフィが紹介をする。

「ん？あ！」

メイシエンの顔を見てレイムリアは思い出す。あの新入生が暴動を起こしかけた時、突き飛ばされた一般教養科の生徒だ。

「そっか、無事だったのね。良かった。その後、私、生徒会室に呼び出されたからあなたが怪我してないかとか、確認できなかつたら気になってはいたのよ。」

でもよかつたわ。それにしても同じクラスか。凄い偶然だね」

レイムリアは満面の笑みを浮かべると、無意識にメイシエンの頭をなでた。

「!!!!!!」

なでられたメイシエンは、なにも言わず顔を真っ赤に染め、うつむいてしまった。

「?.....あ!ごめん。つい、その、馴れ馴れしかった?」

「.....いえ、大丈夫、です。さっきは、助けてくれて、ありがとうございます」

メイシエンは恥ずかしそうに言う。

その様子になんとも先程のレイムリアの態度を怒っている様子は無い。その事に深く安堵するレイムリア。

「ん。別に大したことは無いわ。あんな自分勝手な武芸者が一般の人達を傷つける行為が嫌いなだけ。だから、メイシエンさんも気にしないで」

レイムリアは笑みを浮かべながらそう言うと、メイシエンは顔をうつむかせたまま小さく頷いた。

その様子をミイフィもナルキもどこか嬉しそうに見ている。

そこで、レイムリアは自分がまだ名乗っていない事に気付き、慌てて名乗った。

「あ、ごめんなさい。まだ名乗ってなかったね。私はレイムリア・サイハーデン。元々は一般教養科だったけど、生徒会長さんが今回の事件を未然に防いでくれたお礼にっという事で、武芸科に転科したの」

簡潔な自己紹介に何故か三人は驚いた。

「転科？ たったそれだけで？ どうしてだ！？」

思わず驚きの声を上げるナルキ。

「んむむ。これは、何か、裏事情がありそうね」

妙に鋭い視線を向ける、ミイフィ。

「……」

唯一メイシエンだけは何も言わなかったが、その目は明らかに、好奇心が見え隠れしている。

「えっと、その……」

とっさにうまく説明できなかったレイムリアは、その後三人に連れられ、喫茶店へと向かい詳しい話を聞かれる事となる。

「ふ〜ん。つまりレイちゃんは、あのグレンダンで武芸者としてそれなりに強かったから特別待遇で、転科したって事」

ミイフィがパフェをつつきながら、レイムリアの説明を納得の表情で頷く。

「だが、あのグレンダンで武芸者としてそれなりに強く、しかも汚染獣とも戦ったんだろ？ だったらなんで都市の外、学園都市に来たんだ？」

ナルキの真つ当な疑問にレイムリアは内心苦笑した。

そう、レイムリアは本来都市を出る必要などまったくなかった。

なのに都市を出たのは単なるワガママだ。

むしる家族や陛下、それに何かと自分を慕ってくれる人々も最後は自分が都市を出る事を納得した。今考えると、とても不思議だ。

だが一部、納得できない人もいた。特にあの戦闘狂。彼はよく、「君と戦うとホント興奮するよ。レイムリア。僕だけのモノにならないかい？」などとフザケタ事をいつも言っているのです、その度に思い切り手加減抜きを放ち、何度となく病院送りにしてやった。あの戦闘狂も自分がいなければ少しは落ち着くだろう。と思ったが、

(……なんか嫌な予感がしてきた。あの人、禁断症状が出て、ツエルニまで私と戦いに来ないでしょうね。もう少し入念にダメージを与えた方が良かったかしら?)

さらりと嫌な予感がしたが、あの怪我なら普通に二、三ヶ月は大入りする筈だからまあ大丈夫だろうと、やや楽観的な結論で、自分を納得させると、ナルキの疑問に答える事にした。

「まあ、そんな大した事でも無いんだけど、故郷で少し、トラブルにあつてね。少しい居づらくなったから、ほとぼりが冷めるのを待つついでに都市の外を見たくて、それでここに来たの」

「トラブル?どんな?故郷にいらなくなるトラブルって結構大事だよ!？」

「そうだな。多少の事でなら都市を出ようとは考えないからな」

「……レイちゃん、大丈夫?」

三人の心配そうな表情に、レイムリアは慌てて、

「そんなに心配ないよ。むしる居づらく感じたのは私だけだし、家族とか、知り合いとか、お世話になつてる人達には、最後まで馬鹿な事はやめろって止められたくらいだったから」

そう言う。

実際家族である、孤児院の子供達には泣いて止められたし、幼馴染も半泣きで、「レイムリアが責任を感じる必要なんてないでしょ!！」と言ってくれた。

養父さんも、かなり渋い顔で引き留めてくれた。

他にもレイムリアがほかの都市に行く事を止めた人間は多い。

一部例外として、戦闘馬鹿などある人物は自分の絶好の鍛錬相手が六年もいなくなる事を阻止すべく実力行使してきたが、きっちり病院送りしておいた。

「ま、という訳でそんな気にしないで。たったの六年よ。六年後はちゃんと故郷に帰れるから特に問題ないわ」

レイムリアの気楽な言葉に、三人も表情を和らげる。

その後四人でたわいない談笑をしていると、

「あの……すみません。レイムリア・サイハーデンさんは、あなたですか？」

突然声をかけられ慌てて声の主を見てレイムリアは驚いた。銀髪の小柄で綺麗な少女だったからだ。

「あ、これは先輩。レイムリアに何か？」

ナルキの発言で、レイムリアは目の前の少女の剣帯の色が自分達と違う事に気付き、少女が上級生、しかも武芸科だという事に気がついた。

「用事があります。ついて来てください」

「そうですか。解りました。ごめんね、三人とも。また明日ね」

レイムリアはそう言うつと代金をテーブルに置き、銀髪の少女について行った。

銀髪の少女に案内されて場所はやや古びれた会館だった。

その一室で、やや目つきの鋭い金髪の少女・第一七小隊の隊長リーナ・アントークがレイムリアに対し小隊について（カリアンがした説明より詳しく）説明した。

「さて、レイムリア・サイハーデン。小隊について理解したか？」

「ええ。まあ。それで、アントーク先輩はなんで、わざわざ私みたいな一年にそんな事を説明してくれたんですか？」

カリアンから事前に説明されているレイムリアだったが、初対面でどういう性格かまるで分らないニーナとい先輩を少しでも知るため、あえてとぼけて訊ねてみた。

「ぶははははは」

寝転がり様子を見ていた、やはり上級生の男子生徒が突然笑い声を上げる。

「シャーニッド先輩！」

「いや、ニーナお前が悪い。お前がもって回った言い方するから、この可愛い新入生に上手くとぼけられたんだよ」

上級生の男子生徒は立ちあがり、レイムリアに近づく。

「初めまして。武芸科四年のシャーニッド・エリプトンだ。この小隊では狙撃手を担当してる。暇な時のデートの相手はいつでも誘ってくれ」

「はあ。どうも」

初めて接するタイプに、レイムリアは若干困惑の声を上げる。

シャーニッドの軽い言葉で、話がそれた事を感じたニーナは、咳ばらいをし、話しを元に戻す事にした。

「さて単刀直入に言う。レイムリア・サイハーデン。私は君を第一七小隊の隊員に任命する。拒否は」

「いいですよ。引き受けます」

ニーナのセリフを遮るように、レイムリアは承諾の返事をする。

ニーナは勿論、シャーニッドも銀髪の少女も驚いたようにレイムリアを見る。

「……………ずいぶんと簡単に承諾するんだな。どういつつもりだ？」

「特に拒否する理由がありません。それに、私自身武芸は好きですから、訓練できる環境が整うなら、特に問題はありません」

レイムリアの言葉にニーナは少しだけ感心するような視線を向け、すぐに元の鋭い視線でレイムリアを見る。

「そうか。ではお前がわが隊のどのポジションに相応しいかテスト

を行う。好きな武器を取れ」

ニーナがそう言うと、ツナギを着た少年が簡易武器の束を運んできた。

ツナギの少年の持ってきた武器の束の中からレイムリアは、早速目的のモノを探す。

(・・・さすがに刀剣の種類はそれなりにあるみたいだけど、なんで肝心の刀が無いの!?)

レイムリアが納めたサイハーデンの技は刀でこそ真価を発揮する。特にレイムリアがサイハーデンの刀技を改良した、レイムリアのオリジナルの技は刀でないと十分な力が出せないが、無い物ねだりしても仕方が無いと、レイムリアは深い溜息と共に諦め、普段握る刀と同じ重さ程度の剣を使う事に決めた。

「さて準備はいいか?ではいくぞ!」

ニーナは両手に鉄鞭を握ると、いきなりレイムリアに突っ込んできた。

レイムリアはニーナの双鉄鞭を剣でさばきながら、ニーナの実力を確認すると同時に、慣れない剣での戦闘になれる為に、剣を振るう。

ニーナの攻撃をさばきながら、レイムリアは何とも複雑な気分になった。

ニーナの実力は、悪くは無い。

グレンダンのレベルで考えるならば、少なくとも武芸者を名乗る事ができるレベルだ。

だが横で見ているシャーニッドが、レイムリアがニーナの攻撃をさばいている事に驚いた事に、レイムリアは驚いた。

この程度の攻撃など、グレンダンでは武芸者を名乗るなら防げて当然だ。

それに、レイムリアから言わせれば、今の自分の動きは酷くぎこちなく、正直知人が見たら、何をふざけているんだ!と怒られるよ

うな無様なモノだ。

そんな動きを見て驚いている時点で、ツエル二の武芸者のレベルがグレンダンに比べてかなり低い事が判る。

(………生徒会長が私に協力を求めてきた理由が少しわかったわ)

これからの事を考えるとレイムリアはかなり頭の痛くなるが、対照的に二ーナはかなり満足げな表情を浮かべている。

大方一年にしては強いと喜んでいるのだろう。

その事もレイムリアにとっては頭痛の種だ。

これだけ打ちこんでいれば普通は気付くはずだ、レイムリアが試験とやらが始まってから、ずっと受けに徹している事に。

レイムリアがその気になれば一瞬で勝つ事も、攻守を逆転させることも可能だが、二ーナの実力を見る為に全ての攻撃を受けているから今の状況が成立するのだ。

つまりレイムリアは思い切り手を抜いて戦っている。ある意味屈辱的な状況であるはずなのに、喜んでいる二ーナがある意味哀れになる。

(………さて、どうしよう)

レイムリアは真剣に悩んだ。

勝つ方法など、パツと考えただけで、十以上はある。

どの方法で勝ってもあまり気分がいい勝ち方では無い。

ならレイムリアは自分なりの敬意を表す方法で勝つことにした。

つまり、自分が編み出した刀技。

本来なら二ーナに使う必要さえ無いモノだ。

実際グレンダンにいた頃も、並みの相手には使用さえしなかったモノだ。

レイムリアは使うと決めた瞬間、今まで受け続けていた二ーナの鉄鞭をかわし、ほんのわずかな？間？を作った。

そのわずかな瞬間にレイムリアは構える。

剣を腰に構え態勢を低くする。居合、または抜刀といわれる刀剣

技の構え。

初めてレイムリアが今までにない構えを見せた事に二ーナは笑みを深め、レイムリアに向かって突っ込んできた。

だがもし、この二ーナの行動をグレンダンでのレイムリアを知る者が見たら、無謀と評するか、無知と評するだろう。

この構えをとったレイムリアが、どれだけ恐ろしいかをグレンダに住む武芸者は何度となく見ているから……

レイムリアは剣を抜刀した。その距離は剣の間合いでは無い。

だが風さえも斬るかのような神速の抜刀の放った、衝撃波が二ーナに直撃。

二ーナは堪えきれずに、そのまま壁に直撃し意識を刈り取られた。(……失敗ね。やっぱり刀じゃないと全然遅いね。それに？アレ？が無いからさらに遅いし、威力も無い。は)

レイムリアは先程自分が放った技が本来のそれに比べると、見るに堪えないモノだった事に凄まじく不満を感じた。

レイムリアが放った技。本来のそれは、剣線を見ることさえ不可能とされる技だ。

事実、グレンダンでもこの技を防ぐ事が出来る者はいても、放たれたこの技をかわした者はいまだ一人もない程の絶技だ。

流連刀舞・『閃刃』

レイムリアが編み出した技(命名はほぼ、知人が行った)は、その全てがサイハーデンの理念である『生き残る事』をレイムリアなりに解釈し、とある知識をもとに編み出された技だ。

生き残る事……すなわち相手がどんな攻撃をしようとも、どんな頑強であろうとも、相手より速く一撃で斬る。

事実レイムリアはこの技で数多くの汚染獣を一撃で斬り倒して来た。

そんな一撃を不完全で衝撃波だけとはいえ、直撃したのだ。未熟な武芸者である二ーナが意識を失うのは仕方が無いだろう。

と、そこでレイムリアは周囲の視線に気付いた。ツナギの少年も

シャーニッドという名の先輩も、レイムリアをここに連れてきた銀髪の少女も皆、啞然としていたからだ。

(……………もしかして、やり過ぎたのかな？えっと、まあ、この場は仕方が無いよね)

レイムリアはそう自己弁護すると慌てて、

「これで試験は終わりですね。あ、私、明日の準備があるんでこれで今日は失礼します。さようなら」

と、何とも演技くさいセリフを残して脱兎のごとくその場を去った。

こうしてレイムリアの長い学園生活初日は終わりを告げた。

第二話 出会い（後書き）

今回の話で、出てくる戦闘狂さんは天剣持ちのあの人です。

この話では彼とレイムリアの付き合いはそれなりに深い設定になっています。

いずれ過去編を掲載すると思いますが、彼の事は多分かなりノリノリで暴れさせるつもりです。

第三話 動き出す日々

ニーナはどこか苛立った雰囲気で廊下を歩く。すれ違う生徒も皆おびえたようにニーナを見るが、今のニーナにはそんなこと気にならなかった。

目的の場所に着くと、ニーナはノックもせず、問答無用で扉をあけると、怒鳴るように訊ねた。

「会長！彼女、レイムリア・サイハーデンは一体何者ですか!？」

「……ノックもせずに入室して、いきなりなんだい。ニーナ・アントーク」

部屋の主、カリアンはニーナの怒気をまるで気にした様子は無く、いつも通りの笑みを浮かべていた。

「先程レイムリアを小隊員に相応しいか、テストを行いました」

「で?どうだったんだい、彼女は?」

「……最初は会長の推薦通り鍛えれば、立派に小隊員が務められると考えました。ですが彼女のレベルはそんな物ではありません!彼女は現時点で小隊員を十分務められます。いえ、おそらく彼女は……ツエル二で一番強い武者です」

ニーナ自身そんな事は本来認めたくないのだろう。どこか納得のいかない雰囲気がある。

だがそれでも、レイムリアが最後に見せた一撃。

あれは断じて未熟者の技では無い。

努力に努力を重ねて習得した技だ。

そしてそんな見事な技を習得した者が、ニーナの攻撃をただ防いでいた。

最初はその技だけが彼女の優れた部分なのだとも思ったが、よくよく思い出せばレイムリアがニーナの攻撃をさばいていた時の動きには見覚えがあった。

幼い頃、ニーナを相手に父が稽古をつけている時のさばき方に似

ていた。

そのことに思い至り、ニーナは愕然とした。ニーナはレイムリアを試しているつもりだったが、実際は逆で、ニーナがあの一年生の少女に試さされていたのだ。

ニーナのプライドは傷つけられ、行き場の無い怒りがニーナの胸に渦巻いている。

「……確かに彼女レイムリア・サイハーデンは武芸に関しては何だの一年生では無い。それに君の見立て通り彼女はツエルニで一番強い武芸者だろうね」

カリアンは溜息と共に、ニーナの主張を認めた。

「だが、君にとってはその事は関係ないはずだね？君は元々小隊に入れるレベルの生徒を求めていた。そしてそれが、未熟な一年生では無く、規格外に強い一年生だったとしても君にとってはそう悪い話ではないと思うが……」

カリアンの言葉にニーナは反論の言葉を言えなかった。

実際にニーナが率いる第十七小隊は定員が足らず、おまけに上級生からの風当たりも強い為、人員の確保が困難だった。

そこに現れたのがレイムリアだった。

彼女なら即戦力に、いや第十七小隊の軸になる可能性が高い。だが……

「……何故彼女はこの学園都市に来たのです？しかも本来なら彼女は一般教養科、武芸とは縁遠い立場だった筈だ。もしかしたら彼女は自分の都市を追放でもされたのですか？」

ニーナの懸念はそこだった。初対面で感じたレイムリアという少女の印象は何処にでもいる普通の少女。

その印象が強かったが、話すと、それだけでは無い深みというものがあつた。

そしてその深みはあの技を見て一層強くなった。あれほどの技を身に付けた武芸者が、都市を出る事などそうそう許される筈が無い。未熟者だが名家のニーナでさえ半ば家出の形で、自分の故郷を出

ただ。

ならあれほどの実力を持つレイムリアは？普通なら都市の外、学園都市に来る事など出来ないだろう。

それこそ都市の権力者や周囲の人々に止められるはずだ。

だがもし彼女が犯罪を犯し、半ば追放されたのなら？

そしてそんな人物を強いというからといって、小隊に入れる事は二ーナには出来ない。

だが二ーナの懸念をカリアンは苦笑しながら否定した。

「君の懸念は解ったが、心配はいらないよ。彼女は武芸者として信頼が置ける。それに彼女が都市を出る事になった経緯についても、こちらは把握している。もっとも私個人からはその事を君に話すつもりはないがね」

「何故です!？」

「これは、彼女のプライバシーだよ。他人である私が軽々しく君に話すのは、彼女に悪いからね。どうしても知りたいなら彼女から直接聞くといい」

カリアンは冷たく拒絶するように言うと、二ーナもこれ以上カリアンから情報を引き出せないと思い、無言で退出した。

二ーナのいなくなった会長室で、カリアンは小さく溜息を吐きだし、一枚の書類を見る。

レイムリア・サイハーデンに関する調査資料だ。

これを見た時、カリアンは正直彼女を利用する事に躊躇いを覚えた。

レイムリアは武芸者としては最強に近い能力を持っているが、武芸者として真面目すぎるうえに、優しすぎる。

だから彼女は都市を出た。

そんな少女を利用しようとする自分に、都市の現状にカリアンは妙な苛立ちを感じるしかなかった。

次の日の放課後、レイムリアは早速第十七小隊の使う練習場に足を運んだ。

昨日はごたごたしていたのでまともに挨拶も出来なかったが、あの銀髪先輩や、ツナギ先輩にもきちんと挨拶をしなくては。

その一方隊長であるニーナの会うのは少し気が重かった。

絶対に昨日の手加減を見抜かれているだろう。

（気が重いな、あの先輩プライド高そうだし、絶対、怒ってる。もしかして後で呼び出されて、校舎裏で集団暴行とかしてこないよね）もしそうだったとしても、レイムリアなら三秒で返り討ちに出来るが、正直そんな陰湿な事をされると、気分が悪くなりそうだ。

少し気分が悪くなったので、レイムリアはとりあえず気分を切り替える為、誰もいない練習場に行き錬金鋼を取り出した。

グレンダンで使用していた自分専用の錬金鋼だ。

だがその形は普通のモノとは明らかに異質だ。青石錬金鋼を覆うように黒鋼錬金鋼が取り付けられている。

レイムリアはそれを構えると復元言語を口にする。

「レストレーション」

復元された錬金鋼はやはり異質だった。

青石錬金鋼の柄に曲線を描くように取り付けられた黒鋼錬金鋼。

まるでニーナの鉄鞭にも似ているが、ニーナの鉄鞭はレイムリアの様に曲線を描く形状ではない。

レイムリアはそれを腰に構えると、目を閉じ意識を内側に向ける。心を済ませ、頸の循環を感じる。

たったそれだけでレイムリアの纏う空気が変わる。頸は外には漏れていないが、おそらくこの場に誰かがいたらその空気に圧倒されただろう。

静寂でありながら、まるで放たれば刃の様な鋭さ。レイムリアの放つ空気は矛盾しながらも、見事に調和している。

と、そこで誰かの気配を感じ、レイムリアは構えを解く。

練習場を包む空気は消え、そこは普通の何の変哲もない一室に戻る。

「……………ずいぶんと熱心ですね」

入って来たのは昨日レイムリアを迎えに来た銀髪の先輩だった。

「あ、お早うございます。えっと……………」

「ああ、そうですね。まだ自己紹介もしていませんでした。二年のフェリ・ロスです。これからよろしく」

少女・フェリは表情を動かさず、淡々と自己紹介を終えた。

「え、あ、レイムリア・サイハーデンです。よろしくお願いします。ロス先輩」

レイムリアがそう言った途端、フェリの視線が何割か鋭くなる。

(え?え??私、何か気に触るような事言った!?)

困惑するレイムリア。フェリはその様子に溜息を吐きだすと、

「出来れば名前で呼んでください。名字では兄と紛らわしいので」

「え?兄?……………ああ。もしかして生徒会長の」

「そうです。妹です」

フェリの返事にレイムリアは自然と納得する。確かに容姿が少し似ている。

「……………貴女は、自分の才能をどう思っていますか?」

唐突なフェリの質問に、レイムリアは首をかしげた。

「貴女は故郷では最高位の武芸者だったのでしょ?武芸者である自分に疑問を感じた事は無いのですか?」

「疑問ですか。特に、昔から武芸者として頑張ってきましたから」

「貴女は……………私とは違うんですね」

「?どういう意味ですか」

「私は自分の力が嫌いです。念威操者である自分が……………」
「嫌い、ですか……………」

フェリの言葉は何となくだが、レイムリアも理解できる。幼い頃レイムリアも同じことを考えた。

武芸者である自分が嫌いだった。

だが今はそんな嫌悪感も無い。むしろ武芸者としての力は今では多くの人達を繋げる絆のように思っている。

だからレイムリアは何も言わず、しばらく無言の時間が過ぎた。

その後、ツナギの少年ハーレイがやって来るなり、レイムリアの持つ錬金鋼を見るなり好奇心丸出しの様子でレイムリアに訊ねる。

「あ、なにその錬金鋼!？」

「え、あ、これは故郷で使ってたものです。やっぱり錬金鋼は自分の手に馴染んだ物の方が使いやすいと思って」

「うん。確かにそうだろうけど、一応校則に引っかかるかもしれないから見せてくれるかな。て言うかなんで青石錬金鋼に黒鋼錬金鋼がくつついてるの!？」

ハーレイの疑問にレイムリアは無言で青石錬金鋼を抜いた。

抜かれた青石錬金鋼は刀の形状をしている事にハーレイは驚いた。「なんで刀を黒鋼錬金鋼に入れてるの?」

「それは秘密です」

本当は説明してもいいのだが、長くなりそうなのであえてそう言った。

「んゝ気になるから後でいいから、教えてね。では早速と」

ハーレイはそう言うと、早速レイムリアの二つの錬金鋼のパラメーターを見始めた。

見始めて絶句した。

「なにこの青石錬金鋼と黒鋼錬金鋼!？設定が二つもある!？」

ハーレイの驚きにレイムリアは小さく「あ」と言葉を漏らした。

すっかり忘れていたが、レイムリアは青石錬金鋼に刀以外にも鋼糸という鋼の糸という形状を記憶させている。

黒鋼錬金鋼にも刀を納める鞘の形状以外にも手甲の形状を記憶させている。

刀と鞘はレイムリアのメインの武器だが、状況次第で鋼糸と格闘術も使うので、この設定を加えている。

こんな設定をするよりは二つの錬金鋼を持った方が手間が少ないが、レイムリアはあえてこのスタイルをとおしている。

それにグレンダンにいた頃は常にこの設定だったので、その事をすっかり忘れていた。

「えっと、レイムリア。君って剣で戦うんだよね？」

「正確には刀です」

「なんで格闘戦専用の手甲や、鋼糸？って武器の設定を入れてるの？」

ハーレイの当然の疑問にレイムリアは苦笑しただけで何も答えなかった。

疑問を感じながらもハーレイはレイムリアの錬金鋼の設定のバツクアツプを取る。

その後、ニーナとシャーニッドが来たので簡単な訓練を行った後、その場は解散となった。

だがレイムリアは気になる事があった。ニーナの態度だ。

時折どこか探るような視線をレイムリアに向けてくる。

恐らく昨日生徒会長にレイムリアの事を聞きに行ったのだろう。

それで何かしらの情報を得た。

もっともレイムリア自身探られても困るような過去は、特にない。だがこれから一緒に組んで戦うのに、そんな疑う視線を向けられるのは、正直あまり気分がいい物ではない。

(・・・私、この小隊で上手くやってけるのかな？)

レイムリアは内心そう思うと深々と溜息を吐きだした。

第三話 動き出す日々（後書き）

レイムリアチート企画その一。格闘術を習得させました。

流派は勿論、某戦闘狂のあの方と、某小隊長さんが習得している流派です。

原作では、レイフォンも頸技だけは習得しているようなので、いっそ格闘術も習得させてみようと思いいこのようにしました。

またサイハーデンは生き残る事を前提とした流派のようなので、他の武門の技を習得しても問題無さそうな気がしたのも理由です。

あともう一話くらい入れた後に、対抗戦の話を入れられたらと考えています。

第四話 バイトと約束

レイムリアが第十七小隊に所属して数日がたった。

訓練自体はレイムリアにとっては苦でも無く、むしろゆるいくらいに感じたが、新参者自分が口を出すのも気まずいので何も言わなかった。

また一つ気付いた事がある。

この第十七小隊。どうやらかなり癖がある。

まず念威操者のフェリ。

彼女の能力は高い。実際にその実力を見ていないが、感じる念威や送られてくる情報にはその実力が見え隠れしているが、本人がやる気が無いのか、明らかに手を抜いている事がレイムリアの目には明らかだった。

以前、才能の事を訊ねられたし、自分の力が嫌いだと言っていたことから、おそらく不本意な形で小隊にいるのだろう。

次に狙撃手のシャーニッド。どの彼もあまりやる気が無い不真面目な部分があるが、訓練自体は真剣な事から、フェリとはまた違った理由からやる気が無いように思える。

また彼の動きはどうにもある種の癖を感じる。

その癖はどうにもニーナとの訓練でついた物ではないように思う。ここから先はレイムリアの勘だが、シャーニッドはたぶん癖がつくような連係を組んでいた仲間がいたのだろう。

卒業か、はたまた仲違で分かれたのかまではレイムリアにも解らないが、おそらくその事を彼はどこか引きずっているように思う。

そして隊長のニーナ。

かなり真面目だが、どうにも熱くなりすぎて、周囲の様子が見えていない所がある。

新参者であるレイムリアから見ても、この癖だらけ、いわくだけのメンバーしかないのだ。連係を高めるなら互いの事情を理解

し、その上で訓練しなければせっかくの個々の高い能力を生かせる筈が無い。

数日しか行動を共にしていないレイムリアが気付く事を、隊長を名乗るニーナが気付かないはずは無いはずだが、ニーナの性格から考えるとそこまで気がまわらない可能性もあるが・・・どちらにせよ、この小隊で活動するのは大変だと、レイムリアは改めて思う。

小隊の事を考えて表情が暗くなったレイムリアだが、気分を切り替える。今日は初めてのバイトだ。暗い顔ではこれからやっていけない。

笑顔を浮かべ第一声を口にする。

「いらっしやませ」

奨学金がAランクになったレイムリアだが、全くバイトをしない訳にはいかなかったが、重労働の機関掃除をするつもりも無かった。何か面白そうなバイトは無いかと探し始めた時、メイシエンが喫茶店でバイトをすると聞き、レイムリアも便乗する事にした。

理由はいたって単純。故郷のグレンダンではまず出来ない仕事だからだ。

まずどこの店も天剣授受者をウェイトレスとして雇う店はまずない。

雇ったとしても、今度はお客が緊張して商売にならないだろう。天剣授受者がウェイトレスをする事などあり得ない事だが、このツエルニでなら当然のように出来るので、レイムリアはメイシエンと共にウェイトレスのバイトに励んでいた。

また、この喫茶店のケーキは絶品で、レイムリアもぜひレシピを教えてもらい、グレンダンの子供達にも食べさせてあげたいと思ったのもバイト先を選んだ理由だ。

という訳で、今もメイシエンと共にウェイトレスとしてお仕事をしていたが、

「やつほくメイっち！レイちゃん！遊びに来たよ」

「あ、ミイにナツキ。それに・・・フェリ先輩！？しかも何で、縄でグルグル巻きに!？」

驚愕の声を上げるレイムリア。

「捕まりました」

「だってこの間会った時から話しかかったんだもん」

だからと言って、先輩、しかも生徒会長の妹を縄でグルグル巻きにするミイとナツキにレイムリアは絶句する事しかできなかった。

バイトを終えたメイシエンとレイムリアはそのまま、ナルキとミイファイ。そしてフェリと共に夕食をとり、そのまま帰途へとついた。

「・・・フェリ先輩。その私の友達がご迷惑をかけてすみません」
「いえ。楽しかったので」

フェリはあまり表情を変えないので、迷惑だったかと考えていたレイムリアだったが、フェリがそう言うならそうなのだろう。

ひそかに安堵するレイムリアだったが、突然フェリの髪が光りだして驚く。

「すみません。少々制御が甘くなりました」

（制御が甘くなった！？フェリ先輩が念威操者として凄いのは知ってたけど、ここまで凄いなんて・・・もしグレンダンにいたら私の同僚になってたかも）

驚くレイムリアに、フェリは真剣な表情で、

「これが、私が武芸科にいる理由です。兄は私の念威操者としての才能を勝利の為に利用するつもりで、私を武芸科に転科させました。私は兄を恨みます」

「・・・」

レイムリアにはフェリの気持ち理解できなかった。

本当の意味で血の繋がった家族がないし、家族に利用されるといふ事もレイムリアには想像さえできない事だ。

「……でも、貴女を見て少しわからなくなりました」

「？」

「貴女は、天才的な武芸者でありながら、普通の生活も送っている。今日の、バイトをしている姿を見て、貴女が羨ましくなりました」

「羨ましい、ですか？」

「ええ。自分の才能や環境に振り回されず、確かな自分で在り続けられる。私には出来ない事です」

フェリの言い回しは、レイムリアにとっては少々小難しく、あまり分からぬが、何となく自分がどう言えばいいのかだけは分かった。

「フェリ先輩は真面目ですね」

「？………どういう意味ですか？」

「私はそんなに難しく考えませんでした。自分のしたい事をする。それ以外は特に考えた事はありません。武芸は好きだし、バイトでウェイトレスも楽しそうだからしているだけです。フェリ先輩みたいに、才能とか環境とかあんまり気にしませんでした。」

そんな私だから、フェリ先輩の悩みに答えられるか分かりませんが、言える事は一つです。もっと我儘になつていいんじゃないですか」

「………我儘ですか？」

「ええ。もし念威操者としての自分が本気で嫌いで、何か違う事がしたいなら、私も力になります。アントーク先輩が何か言ってきたら、私が黙らせませす。」

でももし、嫌いでないなら、念威操者として頑張つて、結果を出しながら好きな事を探せばいいと思いますよ。

結果さえ出せば、アントーク先輩も多少訓練をサボっても文句は言えませんか」

レイムリアの提案に、フェリは驚いた。

第四話 バイトと約束（後書き）

今回の話はレイムリアのバイトと、フェリとの友情を結ぶ話です。当初は機関掃除でもいいかなと思いましたが、それでは面白くないので、メイド！もとい、ウェイトレスのバイトにする事にしました。

またフェリのフラグも立てるエピソードも書かせていただきましたが、逆に二ーナのフラグを立てるエピソードがありません。

別に二ーナを嫌っているのではないので、彼女にはもう少ししたら存分に活躍する場面を用意できたらと考えています。

第五話 初めての対抗戦

対抗戦当日、控室ではピリピリした二ーナが何度も繰り返した対戦相手である第十六小隊の戦法を口にしていた。

だが他の三人は割とリラックスしていた。

とりわけ自然体だったのがレイムリアだ。

元々この手の試合は腐るほどこなしたレイムリアだ。今更緊張などする筈が無い。

それにレイムリアから見ればこの程度の試合は、遊びに近い。

緊張などする筈が無い。が別の意味で少し不安だった。

(……先輩、緊張しすぎ。別に負けても次に生かせればいいんだからもっとリラックスして、もっと余裕を持てばいいのに)

浮足立っている隊長の二ーナだ。レイムリアから見てこの第十七小隊は対戦相手である第十六小隊に比べて人数が一人少ない事と、小隊としての連係こそ低いが、個々の小隊員の能力は高く、今回は攻めてなので、隊長さえやられなければ、レイムリアが手を抜いて戦ったとしても十分に勝てる算段が強い。

だが二ーナは必要以上に緊張している。

初めての隊長として隊を指揮しながらの戦闘だから、緊張しているにしても少しひどい。

本来なら緊張を解す気のきいた冗談でも言えればいいのだが、生憎レイムリアにはその手のスキルが無い。

レイムリアもグレンダンにいた頃は初陣の武者の後見人を何度もこなしたが、大抵の者は今の二ーナのように緊張していなかった。なにせ天剣授受者が後見人につくのだ。立場的に緊張はしても、戦闘面ではリラックスする人が多い。むしろ天剣授受者に認めてもらおうと逆に奮起する者が多かった。

それでも緊張していた人もいたが、レイムリアが「大丈夫」と、言えば大抵は安堵していた。

だからこそ緊張するニーナにどう言えば、緊張をほぐせるのか、レイムリアにも解らなかつた。

ここはグレンダンでは無く、ツェルニだ。レイムリアの言葉など何も安堵をもたらす要素が無い。

ニーナの様子にレイムリアは小さく溜息をこぼした。

ニーナの作戦はニーナとレイムリアが突っ込み囮となり、敵の目を引き付けているスキにシャーニッドに隠密行動をとらせ、単独狙撃でフラッグを破壊するというシンプルなものだ。

第十七小隊の勝利条件がフラッグの破壊か、相手の全滅なのだから、これがニーナの取れる最善の策だろう。

レイムリアもニーナの指示に従って動いたが、早くもニーナの策は裏目に出た。

向こうの小隊員三人が旋頸を使い、高速でレイムリアとニーナに向かつて突撃してきた。

分断されるレイムリアとニーナ。

ニーナに二人。レイムリアに一人。

前情報でレイムリアの事はただの新生と判断し、一人が足止めしているスキに、隊長であるニーナを二対一でそうそうに撃破する為の布陣だろう。

レイムリアに襲いかかる小隊員の攻撃を、レイムリアは刀を鞘から抜かず簡単にさばきながら、ニーナの様子を見守る。

ニーナは二対一の状況を双鉄鞭を巧みに防御に使いながら、耐えてはいるが、そう長くは持たないだろう。

シャーニッドがフラッグを狙撃すると、ニーナが倒される。どちらが速いか。

レイムリアの勘では、おそらくニーナが倒される方が速いと思う。

だがそんな苦境のニーナだが、決してその瞳は諦めないという意思があつた。

その瞳を見て、初めてレイムリアは二ーナを少しだけ認めた。

（……………アントーク先輩。今回だけですよ。もし次回の対抗戦も私達を見ないなら、次は知りません）

レイムリアは内心でそう決意すると、小声で通信機に呼び掛ける。

「フェリ。シャーニッド先輩の方に敵は向かっていませんか？」

『……………上手く隠れて狙撃ポイントに向かっていますね』

「そっか。なら、隊長を助ければ勝てるね」

レイムリアはそう言うと、鞘刀を引き抜き相手の武器と撃ち合う。

その瞬間、レイムリアは一気に頸を刀に流し込む。

外力系衝頸の変化・蝕懐

レイムリアの頸技によって相手の武器は一瞬で粉々に砕けた。

驚愕する第十六小隊員に目もくれず、レイムリアは再び頸を練る。

内力系活頸の変化・瞬天。

レイムリアの姿はその瞬間、小隊員の目の前から消え、今まさに

二ーナに襲いかかるうとしていた小隊員二人の目の前に出現した。

「……………なっ!?!?」

驚愕する三人構わず、レイムリアは瞬時に刀を鞘に納め、再び引

き抜き、勢いのまま投擲する。

外力系衝頸の変化・閃槍

頸を纏った刀はあたかも頸の槍のように、二人いた小隊員の片方

を貫くかのごとく吹き飛ばす。

（加減したから死んでないよね）

レイムリアは予想以上に見事に吹き飛んだ小隊員を、一瞬心配そ

うに見つめる。

本来この技は一撃で、汚染獣の外殻を貫通するほどの貫通力を持

っている。

試した事はないがレイムリアが手加減抜きで頸を込め、全力で投

擲すれば、おそらく都市を貫通させる事も可能だろう。

もっとも今の閃槍はレイムリアからすれば、撫でる程度の頸を込

めたつもりだったが予想より派手な事になった。

驚いて動きが止まっているスキにレイムリアはもう一人に注意を向ける。

レイムリアの手には刀は無く、黒鋼錬金鋼の鞘しかないが、それさえあればレイムリアには十分だった。

「レストレーション02」

復元言語を口にする、鞘はレイムリアの両手を包む手甲へと変化。と同時にレイムリアは動く。

外力系衝頸の変化・剛力轍破・絶

レイムリアの拳が小隊員の腹にめり込むと同時に、相手の体に頸を流し込む。

流れ込んだ頸は相手の頸の流れを一時的に阻害する。

レイムリアがグレンダンで学んだ、ルツケンスという名の格闘技を専門とした武門の技を改良した、対人用の技だ。

元々はルツケンスの戦闘狂を黙らせるために編み出したが、対人用の頸技としては中々使える為、割と頻繁に使用している。

動かなくなつた小隊員を見下ろしながら、レイムリアは構えをゆつくりと解くと同時に、試合終了のブザーが鳴り響いた。

どうやらシャーニッドが仕事を終えたようだ。

(・・・今回は勝ちましたけど、次は貴女がしっかりしないと次は勝てませんよ。アントーク先輩)

呆然とする二ーナにレイムリアは内心でそう語りかけた。

第五話 初めての対抗戦（後書き）

割と短めになってしまった対抗戦です。

今回はオリジナルの技を三種出してみましたがいかがだったでしょうか？

頸技についての説明は本編で追い追い出していきますが、今度キヤラプロフィールでも出した方がいいでしょうか？という疑問もありますが……

さてレイムリアですが妙にニーナに冷たい気もしますが、作者がニーナが嫌いでこういう対応をしているわけではないのであしからず。

徐々に関係を改善させるつもりなので、ニーナファンの皆さんは少々お待ちを。

第六話 対抗戦の後・語られる過去

対抗戦が終了し、制服に着替えたニーナは慌ててレイムリアを探したが、その姿は無かった。

いままでレイムリアの過去を聞く事を躊躇っていたニーナだが、対抗戦でのあの強さを見てその躊躇いは吹き飛んだ。

レイムリアは強い。ニーナはそう認識していたが、その認識が微妙にずれている事に気がついたのだ。

ニーナの感覚では一対一で戦えばツエルニで最強と、レイムリアの強さをそう評価していたが、それは断じて誤りだ。

恐らくレイムリア一人でも小隊一つ同等の働きを見せるだろう。いや場合によってはそれ以上かもしれない。

なにせ今日の彼女の動きは、明らかに自分が見てきた武芸者の実力とは一線を隔している。

だからニーナはレイムリアを探した。

彼女を知る為に……

ニーナが自分を必死に探している事を知らないレイムリアは、舞台上でアイスを頬張っていた。

「うん。美味しいです。やっぱり運動後は甘いモノです」

その表情は試合で三人もの小隊員を瞬殺した、歴戦の武芸者には見えないほど幸せそうなユルイ表情だった。

「あ、フェリもアイスが溶けないうちに食べた方がいいですよ」

「……………」

レイムリアに言われアイスを食べるフェリだが、レイムリアが幸せそうにするほどアイスがおいしいとは思わなかった。

「……………レムは本当に強いですね」

「？」

「今日の試合です。私は割と本気で臨むつもりでしたが、貴女には必要なかったようですな」

「ああ。まあ。その、私が言うのもあれですけど、多分このツエル二にいる武芸者で私を苦戦させるほどの武芸者はいないですからね。そう言う意味ではフェリにはサポートのし甲斐が無いかもしれないね」

レイムリアは自然とそう言う。

傲慢のようにも聞こえるが、レイムリアに自分の強さを鼻にかけた雰囲気は無い。

むしろ事実を事実として淡々と言っている。

「……兄から少しだけ貴方の事を聞いています。確か、天剣授受者、でしたか？貴女はグレンダンでその称号を得ていたそうですね」

「うん。グレンダンでも最強の12人にしか与えられない称号。ま、このツエル二では意味の無い称号だね」

「そこまで強い貴方が、どうしてツエル二来られたんですか？私だつてこの学園都市に来るのに、親に相当苦勞をかけた。レム程の武芸者ならまず都市を出る事を許されないとはいけません」

フェリの疑問は当然だろう。都市の統治者が強い武芸者や高い能力を持つ念威躁者が都市を離れる事を許すなど普通はそう簡単ではない。

レイムリアもその疑問はよくわかるが……

（……ん〜メイ達みたいに大まかに話しても、フェリは私の素性を知ってるから、それじゃあ納得しないよね。でも、あの事を話すのは……）

別に話すのはいいが、所詮もう終わった事件だ。

話したところで、グレンダンに今すぐ帰る事になるわけでもない。

レイムリアのした事が、無かった事になるわけでもない。

だが、ある事に気付いたレイムリアは少しだけ躊躇いを感じたが、意を決して自分が都市を出る事になった経緯を話す事にした。

「……ひどく簡単に言うかね。私がある武者を再起不能にしたのが事の始まりです」

「……」

レイムリアの言葉にフェリは何も言わずただ無言で聞いていた。

「……ある試合で、私はその人と戦う事になった。別にその人に恨みとか因縁とかは私自身は無かった。でもその人は違ったみたい。私に恨みがあつた。嫉妬があつた。なにより私から天剣を取り上げたかつた。だから彼は卑怯な手段を使って私に勝とうとした。でも出来なかつた。

そして彼はやってはいけない事をしてしまった。だから私はその人を斬りました。

でもそれで事態は終わらなかつた。その事件は都市を混乱させる事になった。

だから誰かが責任を負わなくてはいけなかつた。だから私は都市を出る事を決めました。

事件のきっかけでもあり彼を殺さず、半端に生かした責任が私にはあるから……

ああ、でもそんな深い責任とかは無いかもしれないですね。私は一応処分という形で都市を出る事になりましたけど、陛下が必要と判断して連絡を受けた時点でグレンダンに戻って、再び天剣授受者として戦場に立つ事になります」

「……そうですか。なら何故、貴女が責任を取らなければいけなかつたんですか？」

「よくわからないね。もしかしたら私が都市を出る必要は無かつたのかもしれない。でも私は何かしらの罰を受けないと納得できなかった。結局はフェリが言っていたように私は我儘なだけですな」

レイムリアはそう締めくくると突然背後に向きを変え、

「そういう訳です。アントーク先輩」

いつの間にかレイムリアとフェリの背後に二ーナがいた。

恐らく殺頸で気配を消していたのだろう。

「……………すまない。本当は立ち聞きするつもりは……………」
「別に構いません。聞かせる為に話しましたから」

「……………なぜわざわざ隊長に？」

「それは隊長が考える事です。私はそのキツカケになればと思って自分の事を話しました。だからアントーク先輩は、考えてください。私が自分の事を話した訳を」

「……………」

ニーナは沈黙する事しか出来なかった。

レイムリアが、グレンダンで最高位の武者だった事。

都市の政治にかかわる事件に関与し、一人の武者を再起不能にした事。

そしてその責任を感じ都市を出た事。

どれもニーナには驚きの連続で、その意味を考えるほど余裕は無かった。

何かを言わなければ。そう思ってもなにを言えばいいのかにーナにも分からなかった。

だがニーナが悩みながらも言葉を口にしようとした瞬間、地面が激しく振動した。

第六話 対抗戦の後・語られる過去（後書き）

レイムリアの関わった事件の事を簡単に書かせていただきました。
もちろん後の話で詳細を描くと思います。

さて次回は、対幼生体&雌性体戦です。

そちらは少し内容を変えるつもりです。楽しみに。

第七話 汚染獣の襲来・決意の少女

「嘘！？都震！？最悪です！！」

レイムリアは揺れの原因に頭を抱えた。

都市の足が崩落か何かで、動けなくなる。

そうなれば汚染獣の格好の餌食だ。

そして何よりレイムリアの勘が告げている。

この揺れはただの崩落に巻き込まれたものではない。

都市の外に感じる圧倒的な飢餓。そして無数の敵意。

恐らく幼生体。

状況は最悪だ。

ツエルニの武芸者の中で汚染獣戦を経験した者が何人いる？

ニーナの対応の遅さからしてここ二、三年は経験が無いのだろう。

ならもつと上の学年の先輩は？

(……………最悪そちらも当てに出来ない！なら私が動くしかない)

レイムリアはそう決断すると、すぐさま状況を考える。

現状ツエルニの武芸者のレベルでは足止め程度が精々だろう。

なら彼らを足止めとして運用し……………その間に自分が幼生体

と雌性体を潰す。

そう決めた瞬間レイムリアは戦術を決めると同時に、鋭い声でニーナとフェリに指示を飛ばす。

「アントーク先輩！フェリ！汚染獣です。先輩は今すぐ武芸者を率いて防衛線をしてください！決して無理せず、防衛線を維持する事に集中してください。フェリは生徒会長に連絡して、今すぐ非常事態を全市民に伝えてください。それと汚染獣殲滅に必要なモノがあります。今からそちらに向かうから必要なモノを用意するように言ってください」

レイムリアの矢継ぎ早の指示に、ニーナのフェリも一瞬何を言わ

れているのか理解できず硬直する。

そんな平和な対応にレイムリアは思わず怒気を纏いながら、

「いいから動きなさい!!!」

「は、はい」

二ーナは慌てて動き出し、フェリも錬金鋼を復元し、念威端子を生徒会長のもとに向け飛ばした。

フェリを連れ、生徒会長室に来たレイムリアはすでに会議を終えた、カリアンと武芸長のヴァンゼに軽く会釈するとすぐさま問いただした。

「状況は？」

「君の警告のお陰で一般人の避難はほぼ無事に完了したよ。だが、戦況は防戦一方だね。いずれはどこかの防衛線が突破される可能性が高い」

カリアンの簡潔な状況説明を聞き、レイムリアは少しだけ安堵した。

最悪の事態……ツエル二の武芸者が防衛線さえ維持できず乱戦になってしまう状況だ。

そうなってしまえば、いくらレイムリアでもすべての住人を助けることは不可能だ。

その場合、武芸科に甚大な被害が出る。

最悪の事態が回避された事に安堵したレイムリアは、大まかな戦況をカリアンに聞く事にした。

「会長。現状最も危ない戦場は何処ですか？」

「……そうだね、どこも危機的状況ではあるが、今すぐ突破もしくは、重傷者を出すようなポイントは無いね。あくまで現状はね」

「そうですか。分かりました。では汚染獣の殲滅を開始します。頼

んだ物は用意してくれましたか？」

「ああ、君の注文通り錬金科のハーレイに用意させたよ。君の使用している青石錬金鋼と全く同じものだ。それと、君の言った条件に合った建物もいくつか候補を上げておいた。後は君の判断で選んでくれ」

「ありがとうございます。それと、ひとつお願いがあります」

「?・・・何かな?この状況だ、私達に出来る事は何でもしよう
未曾有の危機を打破できる人物のお願いだ。カリアンは一切の躊躇無くそう言った。

言ってしまった事をその後激しく後悔する事となる。

「ありがとうございます。この戦闘後、フェリの一般教養科への転科を許可してあげてください」

「?!?」

レイムリアのお願いは、ロス兄妹にとって予想外のモノだった。

だから、カリアンも一瞬何も言えなかったが、直ぐに持ち前の頭脳を駆使し、平静を取り戻す。

「レイムリア。君はいきなり何を言い出すんだね。フェリの事は君には」

「関係があります。フェリは友人です。なら友人が困っているなら助けるのは当然です。それに、これは実戦を経験した武芸者としての意見ですが・・・」

そこで、レイムリアは言葉を一旦止めた。これから口にする言葉はフェリがいる前ではあまり言いたくは無いが、言わなければ、フェリは決して念威操者以外の道は選べないだろう。それにフェリがもしこのまま中途半端な気持ちで念威操者を続けるならば、いつか誰かが言うだろう言葉だ。

武芸大会程度ならまだいいかもしれないが、もしこの先も今のように中途半端な気持ちで、念威操者を続けていればきっとフェリは不幸になる。だからレイムリアはあえてそれを口にする。

「武芸大会程度ならまだいいですが、実戦で手を抜くかもしれない

サポートはむしろ邪魔です。それならまだ才能や実力が無くともやる気のある念威練者の方がずっと良い」

「!?!」

「……………」

レイムリアの言葉に、フェリは驚き、カリアンは黙り込んだ。

フェリは念威の天才として期待される事はあっても、不要だと言われた事は初めてだった。

だからそんな事を言われ、一瞬どう思えばいいのか分からなかった。

怒ればいいのか?……………そんな事に意味は無い。

元々念威練者をやめたかったフェリだ。不要だと言われれば晴れて役目から解放されるのだ。ならこの状況は本来喜ぶべき物の筈だが……………何故かレイムリアにそう言われた事がすごく悔しく思う。

実際、今のフェリの心の中では、レイムリアに必要ないと言われた事に対する、怒りと悔しさ。そして何より寂しさが大半を占めていた。

念威練者以外の道を選べるかもしれないという喜びは、欠片も浮かばなかった。

「……………」

レイムリアの意見はカリアンにもよく分かる。土壇場で信頼できないサポートなど、現場で戦う人間にとっては害悪以外の何物でもない。

そう言う意味では、レイムリアの意見は至極当然だ。

なら能力は低くとも、信頼できるサポートの方が何倍もマシだろう。

そんな事にさえカリアンは気付かなかった。

つまり、カリアンも妹を才能という点でしか見ておらず、現場で戦う人間の立場に立ってみる事が出来ていなかったという事だ。

それにフェリの転科はある意味レイムリアをサポートさせる為に行ったのだ。優秀な武芸者をサポートするには優秀な念威繰者が必要だが、その念威繰者の情報を武芸者が信頼できないと言われれば、どんなに優秀な才能を持つ念威繰者も不要の存在となる。

「……ふうー分かったよ。フェリの一般教養科への転科を許可するよ。で、レイムリア。君は今回もフェリのサポートは出来ないのかい？」

「事態を迅速に解決するならば、前もって説明したとおり、スピードが重要です。フェリの才能は認めますが、ここで手を抜かれるくらいなら、どこかの小隊の念威繰者の力を借りた方がまだ早いと思います」

「……分かった。ヴァンゼ。君の所の念威繰者を彼女に貸しては」

「待ってください！」

「……フェリ？」

「私がやります。私にやらせて下さい！！」

「……」

初めて見るフェリの真剣でありながら、必死な表情にカリアンは一瞬言葉を失った。

失って何か言おうとした瞬間、レイムリアが、

「フェリ。いいの？もしここで力を使ったら、貴女は念威繰者以外の道は選べないのよ」

「レム、貴方は以前に言いましたよね。もっと我儘になればいいのなら私ももっと我儘を言います。念威繰者以外の道も諦めませんが、でも念威繰者としても手を抜きません」

「……うん。フェリ。サポートよろしくね」

「ええ、任せてください。それよりレムこそ、もし失敗したなら、

後で私のお願いを嫌というほど聞いてもらいます」

「え！？……」冗談ですよな？」

「まさか。あれ程自信満々に私の事を要らないと言ったのです。この程度は余裕でこなして当然です」

「えっと、あれは、その、フェリの事を思って……」

「余計なお世話です！さ、さっさと終わらせませよ」

「くっ！！」

ニーナをはじめとした、武芸科の面々は幼生体の群れに苦戦していた。

一体一体はそれほどの強さでは無い。だが堅い外殻を破壊するには全力で頸を込めた一撃を放たなければいかず、現状では足止めが精々の状況だ。

このままでは戦線が突破されるのは時間の問題だろう。

『隊長。お待たせしました。これより汚染獣の殲滅を開始します。』

ラインまで下がってください』

突然聞こえたフェリの声。見ればフェリの念威端子がそこにいた。「殲滅だと！？どういう事」

瞬間、ニーナの目の前にいた幼生体が動きを止め、体が斜めにズレル。

何かが、幼生体を切り裂いたのだ。

その切れ味は恐ろしいほどに鮮やかなうえに、ニーナは一体いつ幼生体が斬られたのかまるで分らなかつた。

そして、汚染獣の殲滅が始まった。

ニーナの目の前にいた、幼生体が次々と切り裂かれていく。

ツエルニの武芸者が総出で進行を防ぐのが精一杯だった幼生体の群れを、何かが次々と切り裂く。

その非現実的な光景に、ツエルニの武芸者は皆ただ呆然とする事しか出来ない。

レイムリアをサポートしているフェリも目の前の光景には驚かざるを得なかった。

ツエルニの旗が掲げられた司令塔に、レイムリアは一人たたずんでいた。

手には青石錬金鋼が握られているが、柄だけで刃は無い。

だがよく見ると、柄から無数の線が見える。

鋼糸……かつてハーレイがレイムリアの錬金鋼を見た時言っていた武器だ。

その武器は無数の鋼の糸を自在に操る物らしい。

レイムリアはその無数の糸を操り、幼生体を次々と切り殺していく。

フェリのサポートのよって幼生体の位置はレイムリアに随時送られている。

ツエルニの武芸者が総出で防ぐのが精一杯だった幼生体を、苦もなく切り殺すレイムリアに改めて驚かざるを得ない。

そしてフェリはもう一つ驚く事があった。

大抵の武芸者では、フェリがもたらす情報を持て余す。

だがレイムリアはフェリの送る情報を的確に理解し、すぐさま攻撃に転じている。

本気のフェリが扱う情報を正しく理解している。

つまりレイムリアは故郷グレンダンで、フェリクラスの念威線者のサポートを受けていた事になる。

もしそうでなければ、確実に渡された情報に翻弄されてしまうだろう。

ある意味において、レイムリアはフェリにとって初めて自分が全力でサポートしても問題ない相手ともいえる。

生まれて初めての全力の念威によってもたす情報をレイムリアに伝えながら、フェリは探していた物を見つける。

「見つけました。一三〇五の方向。距離三十キルメル。地下十二メ
ル。後は貴女の仕事です」

「まかせて下さい」

レイムリアは鋼糸を操りながら移動を開始する。

移動しながらも幼生体の数は勢い良く減り、そしてレイムリアが
目標に辿り着くと同時にゼロとなる。

「さてと。やりますか」

レイムリアはツエルニの外縁部にあるビルの屋上に辿り着くと、
今まで鋼糸として使っていた青石錬金鋼を基礎状態に戻し、すでに
復元されている刀と鞘に手をかける。

幼生体を倒す間にすでに準備は整っている。後は最後の仕上げだ。
レイムリアが抜刀の構えをとると、鞘からレイムリアの頸が溢れ
始める。

本来は許容量を超える以上に頸を込めると、錬金鋼は爆発してし
まうが、レイムリアは独自の技術を用いることでそれを一時的に克
服した。

頸技・連弾

錬金鋼の許容量を超える頸を込めても、錬金鋼の崩壊を防ぐ技だ。
本来レイムリアには不必要な技だが、とある事情で開発したが、
まさかこんな場面で役に立つとは思わなかった頸技だ。

連弾でギリギリまで頸を込めた青石錬金鋼の刀は鞘の中あっても
輝きを抑えきれない。

レイムリアはそれを一気に抜き放つ。

外力系衝頸の変化・閃槍

輝く槍となった刀を投擲し、目標・汚染獣の雌性体に向けて投擲。
その頸の輝きで、試合で使用した時とは比べ物にならないほどの
頸が込められているのが判る。

輝く頸の槍は雌性体のいるであろうポイントに激突すると、岩を
砕き地中にある雌性体を貫く。

視力を強化していたレイムリアは肉眼で、雌性体の撃破を確認し

たが一応訊ねる。

「フェリ。雌性体は？」

『完全に生命活動を停止しています』

フェリの報告に安堵すると、次の問題を解決しなければならない。レイムリアは足場としたビルを見る。

屋上には無数のひびが入り、今にも崩れそうだ。

「……………またやっちゃった」

レイムリアの閃槍は全力で放つ場合、どうしても足に力が加わる為、大抵足場を壊す。

都市の外でならそんな心配は無いが、都市内で使う場合は、足場は壊していい場所が無いと使えない。

グレンダンで初めて閃槍を都市の外縁部から放った時、外縁部を破壊してしまい。危うく外に放り出されそうになった事は、レイムリアにとっても忘れられない思い出だ。

レイムリアは青石錬金鋼を回収すると、なるべくビルを壊さないように跳躍した。

二ーナを含めたツエル二の武芸者は皆呆然としていた。

突然、幼生体が殲滅されたと思ったら、今度はツエル二の武芸者が総出で頸を込めたのでは、と思うほどの膨大な頸の波動を感じ、次の瞬間には巨大な頸の光が外に向かって放たれたのだ。

誰もが訳の分からない表情をしていたが、生徒会長の戦闘終了宣言を聞き、自分達が生き残った事を理解すると、徐々に喜びの聲が上がり始めた。

だが二ーナは素直に喜べなかった。

この事態を解決した人物を知っているからだ。

レイムリア・サイハーデン。

彼女がいるなら、武芸大会も勝てるだろう。だが……………

「あ、先輩。お疲れ様です」

いつからそこにいたのだろう。背後にいつの間にかレイムリアがいた。

「あ、ああ。……汚染獣はお前が」

「その話はまた今度で。今日は疲れました。早く布団で寝たいです」
レイムリアはそう言うと、武芸者の集団を抜けさっさと帰途へとついてしまった。

その時、ニーナは初めてレイムリア・サイハーデンという名の少女の実力を正確に理解した。

第七話 汚染獣の襲来・決意の少女（後書き）

VS 幼生体&雌性体戦でした。

今回はいろいろ原作破壊のフラグを立てました。

まず一番の原作破壊は、フェリの本気が早くも解禁！

このまま本気でレイムリアのサポートを続けければ、フェルマウスを確実凌駕？

デルボネのお婆さんにも勝てる？とところまで成長するかもしれませんが。

次の原作破壊要素はレイムリアの連弾です。

連弾の登場はもつと先の話ですが、レイムリアは使えます。

作中では詳しい理由は語りませんが、この連弾を使える事が、私の中では最も大きな原作破壊の布石になる予定です。

さて次の話では、原作にいない人物の名前が登場しますが、本格参戦は恐らく第三巻辺りの話からになります。

早く二巻分を描き上げなければ……

第八話 グレンダンからの手紙・驚異の足音

試合終了のサイレンが野戦グラウンドに鳴り響く。

「……………勝ったのか？」

勝者であるはずのニーナは、自分が率いる第十七小隊が勝った事に、何故か実感がわかなかった。

今回の試合、ニーナはなにも出来なかった。

以前とは比べ物にならない速さで送られてくるフェリの情報に、ニーナは対応しきれず、そのフォローをレイムリアは完全にこなした。

結果、ニーナは戦況に翻弄され、結局第十四小隊の小隊員を一人足止めする以外は何も出来なかった。

シャーニッドもフェリの変わりように驚いてはいたが、彼は狙撃手だ。

さまざまな情報をもとに最適な狙撃ポイントに移動するだけだ。

ニーナの様に翻弄はされなかった。

第十七小隊。ニーナが作った小隊の筈だが……………

「……………これが、私の目指した小隊なのか？」

ニーナの疑問に誰も答えてくれなかった。

『親愛なるレムお姉さま。』

そちら、ツエルニの様子はどうですか？

グレンダンは相変わらずです。

相変わらず汚染獣の戦闘ばかりですが、平穩無事です。

でも、やっぱりお姉さまがいないのは寂しです。

天剣授受者・レイムリア・ヴォルフシュティン・サイハーデンが

戦場にいないのは凄く寂しいです。

この間もレムお姉さまが後見人についてくれない事を、残念がる
武芸者を何人も見ました。

道場でもレムお姉さまの指導が受けられない事を、残念がる門下
生がほとんどです。

あ、あと、馬鹿のサヴァリスが、陛下に都市の外に出る許可を毛
らいに行つて、ボコボコにされると言った珍事もありましたが、や
っぱりグレンダンは平和です。

でもお姉さまがいないのは寂しいです。

まだ六年もの間、お姉さまがグレンダンに帰れないと考えると、
寂しくてレンは泣いてしまつかもしれません。

早くレムお姉さまがグレンダンの地に帰ってくる事をお祈りしま
す。

親愛なるレイムリア・ヴォルフシュティン・サイハーデンへ

「イン・アウレストル」

レスティ

迷い込んだ手紙を勝手に開けてしまった事に、メイシエンは激し
く自己嫌悪に駆られてしまった。

手紙を勝手に開けたことがばれないように、慎重に封をしなおよ
と、改めて溜息を吐きだす。

「レスティーンって誰だろう？それに、天剣授受者って何だろう？」
手紙の差出人、レスティーン。妙に文字と手紙が綺麗な事から、
お金持なのだろうか？

それに陛下という単語もあつた。

ならきつと高貴な人物なのだろうか？

そんな人物がレイムリアをお姉さまと呼んでいる。

レイムリアが武芸者として凄い。という事は一年生でも有名な話

だ。

なら王様の家族の護衛でもして、仲良くなった王家の人間なのかもしれない。

なんだか物凄く負けた気分になる、メイシエンだった。

差出人とは別にもう一つ気になる単語があった。

天剣授受者………武芸者の称号だろうか？

物凄くかつこよさそうだが………

「ん〜おいしい」

放課後、レイムリアは一人訓練時間まで甘いクッキーを食べていた。

先日久しぶりに作った会心の出来の逸品だ。

だが加減をまた間違え、かなり多めに作ってしまった。

お昼にメイシエン達にもお裾分けしたが、それでも余ってしまった。

なら小隊のみんなにも食べてもらおうと、持って来たのだが、小腹がすいたので少しつまみ食いをしている。

つまみ食いをしながら、レイムリアは今朝来ていた手紙の事を思い出す。

今回来た手紙は幼なじみのリーリンに孤児院の子供たちからだったが………

「ん〜なんでレンの手紙が無かったんだろ？」

レンこと、レスティーンはグレンダンの孤児院でも特にレイムリアに懐いていた子だ。

レイムリアがグレンダンを出る時も一番反対したことからその事はうかがえる。

なにせ、レイムリアが聞き入れないと知るやいなや、『あの女王に抗議しに行くと錬金鋼を手に单身王宮に乗り込もうとした事さえある子だ。』

その時はレイムリアとリーリンの二人がかりで必死になだめて何とか未遂に終わったが、もし放置して十歳にも満たない子供に、女王の恐怖をトラウマと共に植え付ける事態になるのは正直嫌だ。そんなレンが、リーリン達が手紙を出す時に自分だけ出さないと、いう事があるのか？

あの子に限ってそんな事は無いと思うレイムリアだが……（ん〜もしかして途中で変な都市に引っかかって、遅れてるのかな？）

レイムリアがそんな事を考えていると、

「あ、早いねレイムリア」

「こんにちは、レム」

「オッス、レムちゃん」

ハーレイにフェリ。そしてシャーニッドが控室に入って来た。

「あ、皆こんにちは。これ、よかつたら食べてください。調子に乗って作り過ぎて困ってたんです」

レイムリアは、クッキーの包みを差し出す。

「お、サンキュウ。じゃあ、お言葉に甘えて」

「それでは、私も」

「じゃあ、僕も」

三人はレイムリアのクッキーを一枚食べ、すぐさま一枚目に手を出した。

その食べる速度から見て、どうやら好評のようだ。

「あ、アントーク先輩の分も残しておいてくださいね」

一応釘をさすレイムリア。さすがにフェリは心配ないだろうが、シャーニッドとハーレイは若干不安だ。

だが結果的に一番多く食べていたのは、フェリだったのはレイムリアも予想外の事だった。

「うーん。ニーナ遅いね。あ、レイムリアもういいよ。さすが、頸

の量が凄いな。だからこそあの鋼糸つて武器を自在に操れるんだね」
ハーレイはレイムリアの錬金鋼のステータスを見ながら、納得するよつに言う。

「そんな事無いですよ。私にあの技を教えてくださいました先生に比べればまだまだ拙い使い手です。先生なら鋼糸で雌性体を岩ごと、バラバラに引き裂く事くらい朝飯前にこなしますよ」

「……レムちゃん。そんな化け物を引き合いに出されても正直、どうコメントしていいのかわかねーわ」

シャーニツドのコメントにフェリもハーレイも頷く。

「そうですか？まあ、先生はグレンダンでも別格に強い武芸者ですからね」

「ちなみに、レムとその人が戦ったら、どちらが強いのですか？」

「ん〜正直負ける。かな？戦った事無いし……でも無責任な人は私と先生が互角だ、なんて言うんですよ！まだまだ私が先生と同じ域に到達してる訳無いのに」

レイムリアの評価が、正確なのかどうかは、三人にもよく分からない。

だがレイムリアがそう言われるには理由がある。

天剣を度々病院送りにしているのだ。

周囲に天剣最強と同等と思われるも仕方が無いともいえる。

「うん。もう、いいよレイムリア。だいぶ参考になったよ。あ、そうだシャーニツド先輩頼まれた物です」

ハーレイはそう言うと、復元前の黒鋼錬金鋼を二つ差し出した。

シャーニツドは黒鋼錬金鋼に頸を走らせ、復元するとかなりごつい銃が復元された。

その銃を見てレイムリアはその用途に気付いた。

「もしかして、銃衝術ですか？」

「お、さすが。よく知ってるな」

「なにそれ」

「銃を使った格闘術です。私も使い手は一人くらいしか知らないで

すけど、かなり珍しい戦い方ですよ」

「へえ、じゃあ、シャーニッド先輩も使えるんですか？」

「んにゃ。俺のはかっこつけたがりの馬鹿がつかう技術だよ。うちは人数少ないからな、少しでも手数が多い方がいいだろ」

シャーニッドはそう言うが、ただのかっこつけたがりの馬鹿が、そうそう銃衝術に手を出すとは思えなかった。

それに急にシャーニッドがそんな事を言い出したのは……

「すまない、遅れた」

いつもは一番に来るはずの隊長のニーナが一番に遅れてきた。

「待たせて済まないが、今日の訓練はなしだ。各自自由訓練だ」

「？珍しいですね。隊長が自分からそんな事を言い出すのは」

今までレイムリアのクッキーを食べながら、本を読んでいたフェリが驚いたように顔を上げた。

「ああ、調べ物があつてな。今日はそれを少し詰めたい。では済まない」

ニーナはそう言うと、さっさと帰ってしまった。

「気に入りませんね。あの人のあの態度。何か企んでいるに違いありません」

フェリの熱弁に、レイムリアは苦笑する以外なにも出来なかった。確かにニーナにしては珍しいが、ニーナの考えそうな事は何となくだが、レイムリアにも予想がつく。

大方前の対抗戦でレイムリアとフェリの実力を見て、劣等感でも感じたのだろう。

レイムリアも昔、他の天剣授受者に対して同じ感情を抱いたので何となくわかる。

(まあ、無茶するなら止めればいいかな)

武芸者が強い者に対してそう言った感情を抱く事は普通だ。まあグレンダンではその感情が、逆に相手を超えようとする感情に変換

される事が多い。

そもそもレイムリアが都市を出るきっかけとなった事件も、結局のところ相手の劣等感が嫉妬に変わった事が原因だ。

ある程度してからフォローすればいいだろうと、レイムリアはそう結論して、意識を現実に戻した。

「そう言えば、フェリ。その荷物はなんですか？」

「ああ、そうですね。言うのを忘れていました。実はレムを夕食に招待するように兄に言われました。なので先日の約束を果たしてもらおうと思い、食材を購入しました」

「……………そうですか」

レイムリアはそう言いながら、フェリの買った食材を見る。

明らかに一食分とは思えない量の食材。そして購入した食材からどういった料理を作るのかが想像出来ない。という状況。

（……………もしかして、フェリって全く料理した事が無いのかな？）

レイムリアはその最悪の予想を思い浮かべ、最悪のトラウマを思い出させる。

孤児院で調理場を破壊した、悪夢を……………

（素人の料理ほど怖い物は無いわ。よし気合を入れてフェリと料理をしよう）

レイムリアはまるで、大量の汚染獣を相手にするかのように真剣な表情をしながら、フェリのマンションに向かった。

フェリの料理の腕は……………全くの素人だったが、最悪のレベルでは無かった。

レイムリアはグレンダンで培った料理のレクチャースキルをふんだんに使用し、フェリと料理に励んだ。

結果簡単なモノだが、満足いく物が完成した。

表情の変化が少ないフェリもどうやら満足したような表情を浮か

べている。

「ふむ……これは美味しいね」

「それはどうも」

上機嫌なカリアンは、レイムリアとフェリの作った料理を褒める。褒められたフェリも満更ではないようだ。

「実は、手料理というものにはとんと御無沙汰だね。ありがたいよ。しかも、フェリも作ったそうじゃないか。とても嬉しいよ」

「……別に兄さんを喜ばすために作った訳ではありません。それよりレムに話があるそうですね。どんな話ですか？」

照れ隠しの為だろう、あえてそんな事を訊ねるフェリにカリアンは笑みを深め、レイムリアは苦笑した。

「ふむ。その話は食後にしよう。今は美味しい食事を楽しもう」

上機嫌なカリアンに、顔の赤くなつたフェリ。そんな様子を見ながらレイムリアは久しぶりに一人で無い夕食を楽しんだ。

「レイムリア。まずこれを見てくれないか」

カリアンに渡されたのは、一枚の写真だ。

「先日の一軒で、都市外の警戒にも予算をしく事になってね。試験的に飛ばした探査機が送ってきた映像だが……」

レイムリアに渡された写真はお世辞にも映りはよくなかったが、カリアンの懸念する事は理解した。

レイムリアは写真を無言でテーブルに置くと、フェリがマジマジと写真を見て首をかしげる。

「何ですかこれは？」

「汚染獣。しかもツエル二の進行方向ですね」

「話が早いね。我々もそう結論づけた」

カリアンの言葉に、フェリは眉を吊り上げる。

「兄さん、レムにこれの相手をさせるつもりですか!？」

「すまないが、現状、ツエル二の武芸者では汚染獣に抗うのは難しいのが現実だよ」

「そうですね。この間の幼生体との戦闘を見る限り、勝つ可能性は低いですね」

「でも……」

「私としても、レイムリア一人に全てを背負わせるつもりは無い。だから率直に訊ねたい。君ならどう都市を導く？」

カリアンの問いに、レイムリアは勿論、フェリも驚いた。

フェリの知る兄は、腹黒で、いつも策略、謀略を練るような人物だ。

そんな兄が、素直に何かを訊ねると言う行為をするとは、フェリも想像して事が無かった。

「……そうですね。今回はまあ、間に合わないと思いますから、私になんとか。現状、汚染獣の種類が判らないですが、すぐ近くの山からして……雄性体の二期以降だと思えます。まあ雄性体なら錬金鋼次第ですが、私一人でも倒せます」

「そうか」

「ですが今後の事を考えるなら武芸科にも汚染獣を知ってもらおうが一番です。雄性一期くらいなら、小隊員を何人が連れて実地で指導しながらの戦闘も可能ですが……」

レイムリアがさらりと言った内容に、カリアンとフェリは硬直した。

「一ついいかい。まさか君は、もしその雄性一期なら、今回もその訓練法を実施したのかい？」

「？ええ、まあ。雄性一期が一匹だけなら、武芸者なら一人でも撃破は可能ですよ。むしろ幼生体の方が厄介ですね。それに私も八歳の時には一人で雄性一期を倒せましたし、私の孤児院の子なんて、七歳で単独撃破しましたよ。二小隊がかりなら余裕でしょう」

まるで子供お使いレベルで言うが、それはレイムリアの感覚がオカシイだけだった。

レイムリアは幼い頃から技術もそうだが、なにより頸の力が凄まじく、レイムリアが引き合いに出した子供も、一般的な武者のレベルで言えば、十分化け物クラスの頸を持っているから、そのような非常識な事が可能なのだ。

またグレンダンは、基本的に武者の質が異常に高いうえに、対汚染獣戦においてのノウハウもかなりあるから、他の都市では常識とされる事が、まるで常識のように語られるのだ。

「……………私としては、もう少し安全な手法をとって貰いたいね」

「そうですね？なら、今回は成体になった汚染獣を見てもらう。そして、私の力を見てもらう事にとどめましょう」

レイムリアの提案にカリアンは素早く頭を働かせる。

汚染獣を知るといふ事は、確かにいい。今後の事を考えれば、参考資料としては十分だ。

またレイムリアから、汚染獣の特徴を教えてもらい、それを資料として授業の一環として学ばせる事も、ある意味においては十分に役に立つ。

そしてレイムリアの実力を示す。

これもいい案だ。未熟者が集まるこの学園都市において、熟練者はかなり貴重な存在だ。

レイムリアがどの程度人に物を教える能力があるか次第だが、レイムリアが教える事は確実にツエルニの武者にとってプラスになる事は確かだ。

だが武者はプライドが高い。一年生に教えを請う事に激しく反発が出るだろう。

それを先に実力を示す事によって、封じる。

「……………ふむ。悪くないね。だがこれは、君が教導を行う事が前提だが」

「構いません。グレンダンでは一応武門の後継者です。教える事には多少慣れてます。もっとも、ツエルニの武者に教えるのは基礎

力の向上と、対汚染獣戦におけるセオリーが中心になると思います」
「……………いや、それだけでも、かなりの部分で改善がされる筈だ。だがいいのかね？ そうなれば、いらぬ注目を集めてしまいうよ」

「ああ、二度の対抗戦でもう注目を集めているので、もういいです。素性さえ話さなければ」

「ふむ。そう言えば、君の素性を知られると何か問題でも？」

「いえ、そう言う意味では無いんですが……………積極的に風潮する事でも無いので」

レイムリアはあえてそう言ったが、本心としてはせつかく自分を知らない都市に来たのだ。出来るだけ周囲の人が自分を特別視するような環境を作りたくないだけなのだ。

「まあ、いいだろう。こちらとしては君に多大な力を作っているからね。その程度は任せてもらおう。さて、今回の汚染獣討伐に必要な物はこちらで全責任を持って用意させよう」

「ありがとうございます」

「いやいいよ。必要なモノとしては武芸者の動きを阻害しない、都市外戦闘用の汚染物質遮断スーツくらいかな？」

「それは勿論そうですが、あと錬金鋼も出来れば汚染獣用の物を用意してほしいですね」

「？君の錬金鋼では駄目なのかね？」

「まあ、雄性一期程度ならこれでも余裕ですけど、今回は二期以降です。正直言えば、錬金鋼の耐久力に不安があります」

「ふむ。分かった。そちらも手を打とう。よろしく頼むよ」

カリアンが頭を下げると、レイムリアとフェリは再び驚く。

「そ、そんな頭を上げてください会長」

「……………兄さんが頭を下げた！？ どうやら、今回は本当にただ事ではないようですね」

慌てるレイムリアとは対照的に、驚愕に表情を歪めるフェリ。

妹の様子に、カリアンは内心妹との関係を少し改善するべきかと

考えた。

第八話 グレンダンからの手紙・驚異の足音（後書き）

年明け、最初の更新となります。

今回はオリジナルキャラからの手紙と、対汚染獣戦のお話となります。

そして、ツエルニの武者強化プランの始まりにもあたります。尤もこの結果が出るのは暴走編辺りくらいになると予想しています。

さて手紙に登場した、オリジナルキャラですが、ある意味においてこの小説と原作との一番の違いとなるキャラになる予定です。

本格参戦はまだ先ですが、早く登場させたいです。

それに合わせ、最近グレンダンでの過去のレイムリアの話を考えています。

この小説に掲載するには、もう少し話を進めてからになるのですが、早く掲載したいので、別の小説として掲載すべきか悩んでいます。

意見がある方は感想にアドバイスをくれると幸いです。

第九話 襲来を知らせるモノ

レイムリアがツエルニの進路上に汚染獣の存在を知った次の日、小隊員および、上級生の武芸者がすべて集められた。

全員に浮かぶのは、困惑の表情だった。

まだ武芸大会には時間があるのにこの召集。何かしらの緊急事態であるには違いないが、その内容が全く分からなかった。

もっともこの中の二名だけはその召集の意味を知っていた。

「静粛に。これより諸君が集められた理由を生徒会長が説明する」

武芸長であるヴァンゼがそう言うと、カリアンに視線が集まる。

「突然の召集。皆が困惑するのは理解します。前置きは抜きにまずこれ見てもらいたい」

映し出されたのは、昨夜レイムリアとフェリが見た写真を拡大した物だ。

全員がそれを見て、この写真が一体何なのか理解する者は少なかった。

だが一部理解する者もいた。理解して、それを否定するように顔が青くなる。

「分かり辛いが、これは汚染獣を写した写真だ。しかもツエルニの進路上にこの汚染獣は存在する。現状ツエルニが進路を変えない以上、接触の可能性が高い事を皆には認識して欲しい」

カリアンのはつきりとした宣言に、さすがに皆がどよめく。

ついこの間幼生体と戦ったばかりなのに、また汚染獣との戦闘。皆が幼生体との戦闘を思い出し、不安を隠せずにいる。

「今回に関しては安心してほしい。今回私達は幸運にも対汚染獣に詳しい人物に、協力を仰ぐことに成功した。その人物は先の幼生体との遭遇時に、それを殲滅し、更に、遠く離れた雌性体をも倒した人物だ。そして今回その人物は全面協力を約束してくれた。よって今回はその人物に全てを託す事になったが……」

カリアンはそこで言葉を切る。そしてここに集められた武芸科の皆の顔を見る。

汚染獣との戦闘を回避できたことに安堵しながらも、どこか不満がある。

その反応に、カリアンは安堵した。

もしここでただ安堵するだけのようなら、いずれにせよツエルニはお終いだらう。

「だが、君達にも誇りがあるだらう。たった一人に全てを任せ、自分達だけが安全地帯にいる事は不満だらう。故に今回その協力者に交渉し、後方支援として約二十名の同伴を許可してもらった。更に汚染獣との戦闘の様子を見せてもらおう事にした。

勿論、その人物が敗北した場合、後方支援の二十名が真つ先に第二陣となり、諸君が第三陣となる。これは正真正銘、命をかけた戦場だ。強制はしない。だがここで戦えない者は、武芸者たる資格ない者だと私は認識する。

なおこの事は、混乱を避けるため、一般人および、下級生の武芸科の誰に話す事を禁止する。もし破った者は嚴重に処罰される事となる。

諸君に理解ある行動を期待する」

カリアンの演説が終わると、再びヴァンゼが細かな説明に入った。今回の後方支援二十名は希望者の中から、ヴァンゼとカリアン。

そして協力者との協議で選ばれる事、現状分かっている汚染獣に関する情報などを話しその場は解散となった。

「……レイムリア、話がある」

集会が終わった後、レイムリアは二ーナに呼び止められた。

「分かりました。何処で話します?」

ある程度予想していたので、特に慌てる事無くレイムリアは対応

した。

「そうだな。どうせこの後、小隊で集まる事になる。その場で話そう」

レイムリアは頷くと、ニーナは人ごみの中に姿を消した。

「さて、では話してもらおうぞ。協力者とはお前だな」

「はい」

明らかに断定の口調に、レイムリアはとぼける事も出来ないので、素直に認めた。

「……つまり、レムちゃん一人で汚染獣を相手するのかわ？」

明らかに呆れた口調のシャーニッド。

「はい。現状では私が一人で戦う方が、まだ安全です」

レイムリアは淡々と事実を告げるように言っていると、

「ふざけるな！ たった一人に全てを任せて、私達に安全圏にいろだと！ そんな事認められる訳が無いだろ！！」

激昂するニーナ。

レイムリアとしてもニーナの怒る理由は分からないでもないが、正直な話足手まといを庇いながら戦闘をする余裕があるか、分からない状況だ。

さすがのレイムリアも相手が何期かもわからない状況で、更に錬金鋼に不安があるのだ。

これ以上不安要素を増やすつもりは無い。

せめて天剣を持っていれば、レイムリアが後方支援を務め、ツエルニの武芸者に任せると言う手段もとれたが、今回はそうもいかない。

「先輩気持ちは解ります。でも、都市を守る為にはこれが最善です。弁えてください」

レイムリアはそう言っていると、これ以上言う事は無いという風に、ニーナ達の前から姿を消した。

レイムリアが去った後、ニーナは苛立ったように壁を殴る。

その行為に、今までずっと無言だった、フェリが大きく溜息を吐きだした。

「隊長。我儘も大概にした方がいいですよ。まあ先程のレムの言い方も少し悪かったですけど……」

「なッ!? 我儘だと!?!」

「隊長は十歳にも満たない子供の時に、汚染獣を一人で倒した事がありますか?」

「……はあ?」

フェリの質問に、ニーナはただ絶句し、シャーニッドはどこか呆れた声を上げる。

「レムは八歳で成体の汚染獣を一人で倒したそうです。それ程の事が出来る存在だそうです。そのレムが最も勝率が高いと思ったのが、単独での戦闘です。まさかその意味も解らないという訳でもないですよ?」

フェリの言いたい事は、ニーナにも分かる。

「……つまり私達の事を足手まといだと?」

「はい。なら逆に聞きます。隊長はレムと一緒に行って共に闘えますか?」

「それは……だが私にも何かできる事が」

「あるのであれば、最初からかレムは協力をお願いするでしょう。つまり今回は隊長を含めたツエルニの武者者にレムは何も期待していない事になります」

ハツキリと、フェリの口から言われたニーナは、それ以上何も言えなかった。

「ですがそれは?今回?の話です」

「?」

「今回は準備に時間が無いから、レム一人で戦う。それだけです。でももしかしたら次があるかも知れないから……だからレムは危険を冒してまで、汚染獣の情報を広めました」

「……」

「次は後ろを支えて欲しい。共に闘ってほしい。そう思わない人間が、わざわざ自分の実力をさらけ出したうえに、ツエルニの武者の教導を引き受けると思いますか？」

「!? なに!! つまりレムリアは……」

「期待してると言う事ですよ。隊長を含めた、ツエルニの武者を」
「そうか……」

二ーナはそれを聞いて、改めて決意する。

今回は無理でも、次こそはレムリアと共に闘う。

ならばやるべき事は山のようにある。

そうだ。前回の対抗戦も二ーナは足手まといにしかならなかった。なら出来る事をするべきだ。こんな所で腹を立てている時間は無い。

「すまない。フェリ。どうやら私が馬鹿だったようだ」

「次からは、ご自分で気付いてください。その方が私も面倒が少なくて助かります」

「そうか、ありがとう」

「は」

二ーナと別れた、レムリアは深々と溜息を吐きだした。

二ーナに事実を事実として言ったが、正直気分が良い物ではない。暗い顔で歩いていると、

「きゃっ」

「へ？」

誰かにぶつかったようだ。

そして慌ててその人物に近づく。

「あれ、メイどうしたの？」

「……え、あ、ナツキがレイちゃんに用があるから、三人で探してたの」

「え？ナツキが？私に？」

「うん。それに私も用事が、あつたから」

「え、メイも？」

「うん。これ」

メイシエンが差し出したのは一枚の手紙だ。

「私の所に、紛れ込んでたから……」

真っ赤になりながら、手紙を差し出すメイシエンにレイムリアは微笑を浮かべる。

見れば、レンからの手紙だ。

それで納得した。どうやら誤配でメイシエンの所に届けられたようだ。

「そっか。わざわざありがとう」

レイムリアは無意識にメイシエンの頭をなでた。

「あ……」

「ん……あ、私また」

「え、あ、その、私はその、嫌じゃないよ」

「そっなの？ならいいけど」

レイムリアはそう言うと、メイシエンを抱き起こし、ナツキのもとに向かった。

ちなみにその間メイシエンの顔は真っ赤なままだった。

「すまん。レム。頼みがある！」

武芸者らしい率直な頼み方に、レイムリアは啞然とした。

「えっと、何？」

「実は都市警に臨時出勤枠と言う物があって、その出勤員枠に余りがあるらしい。それで何処で知ったのか、上に私がレイの知り合い

だと知られ、その、声をかけるように言われた」

「ああ、なるほど。グレンダンにも似たような物があつたから、何となくわかるよ。つまり都市警に協力でしょ？」

「ああ、勿論給料は出るが、かなり安い。それに不規則だ。正直、小隊員のレイを誘うのは抵抗があるが……もし嫌なら断つてくれてもいいぞ」

「んゝ別にいいよ。似たような事はした事あるし、お給料も出るなら断る理由は無いよ」

レイムリアのあつさりとした返事に、頼んだ本人のナルキの方が驚いてしまった。

あつさり承諾したレイムリアだったが、まさか承諾したその日にいきなり要件を頼まれるとは思わなかった。

「すまない。いきなりこんな事になるなんて」

「その話はいいよ。それに、私も少し暴りたい気分だからちよつどいいよ」

「ん？今さらりと、物騒な事を言わなかったか？」

「え？気のせいだよナツキ」

「そ、そうか、気のせいか」

何度も頷きながら、自らを納得させるナルキ。

二人は再び意識を、今回の犯罪者が宿泊する、宿泊施設に向ける。相手は不正にツエルニの研究データを盗んだ一団だ。

しかも……

「五人。武者者ね」

「！？五人も」

「うん。しかも結構やりそうね。このままだと突破される」

レイムリアはそう言つと、すぐさま剽を練る。

内力系活剽の変化・旋剽

レイムリアは強化した脚力をモノを言わせ、一気に手近にいた一

人の懐に急接近する。

流連刀舞・閃刃

必殺の一閃が、もつとも近くにた一人を吹き飛ばす。
すぐさま刀を鞘に戻すと、レイムリアはすぐさま刀を引き抜く。

外力系衝剄の変化・閃槍・爆

一番遠くにいた、多分運搬役らしき二人に引き抜いた刀を投擲する。

引き抜かれた刀は二人に向かって直進し、直撃寸前で、刀を包む剄が爆発した。

その余波で二人が気絶せるのを確認したレイムリアは、瞬時に鞘を、

「レストレーション02」

手甲に変化させると、剄を纏った拳を叩きつける。

「ガッ!？」

一撃で気絶させると、残る一人を睨みつける。

「な、何者だよ!?!? 学園都市にこんな……」

男の声は悲鳴に近かった。まあ理解できなくもない。

たった一人で瞬時に四人もの武芸者を瞬殺したのだ。男が混乱するの仕方が無いだろう。

レイムリアは最後の一人を無言で、威圧する。

男は動けず、結局他の都市警に取り押さえられた。

レイムリアはその様子を見ながら、願った。

(汚染獣も、これくらい簡単にけりがつくといいいけど……)

レイムリア自身不安なのだろう。

初めて、自分一人に一つの都市の運命を背負うという事に……

第九話 襲来を知らせるモノ（後書き）

はい。今回はかなり原作無視な展開になってしまいました。
勢いとは凄いモノです。

対汚染獣戦も原作とは違う展開になりそうです。

正直ここまでやっていいのか、少し不安です。

そして何気にフラグを立てるレイムリアさん。彼女の将来はどうなるのか？生暖かい目で読んでくれると幸いです。

ちなみに原作でも出番の少なかったハーレイさん。彼の出番は・・・

・・・多分少ないでしょう。

番外編 レステインの手紙（前書き）

この話は対老生体戦後の話です。

本気で勢いと、思いつきで描いた作品なうえに、一部キャラが崩れます。

それでいい方は、本文をどうぞ。

番外編 レステイーンの手紙

レイムリアは届けられた手紙に、眉をひそめた。

レンからの手紙だが……

「なんで、フェリヤメイ。それに……ーナ先輩宛てにレンが手紙を？」

レイムリアは手紙に三人の事を書いたが、何故レンが三人宛てに手紙を書くのか全く理解出来なかった。

とりあえずレイムリア宛てに届けられた手紙を読んでみる事にした。

『親愛なるレムお姉さま

お久しぶりです。そちらの様子はどうですか？

先日、届けられたお手紙に、レムお姉さまがツエルニで老生一期と戦われたと書いていましたが、正直レンは心配でした。

今のレムお姉さまは天剣をお持ちでないのに、老生体と戦闘だなんて、正直不安でしたが、レムお姉さまこうしてお手紙をくれたことから、無事なのだと信じてます。

お姉さまがグレンダンにいた頃、お姉さまは戦場での無理は死に繋がると言っていたのに、そのお姉さまが無理をするなんて、少し怒りたくなります。

でも、少しお姉さまらしく思います。

それと先日の手紙には書けなかったのですが、お姉さまに報告したい事があつたんですけど……やっぱり報告は次にお姉さまに会ったときにします。

きっと驚いてくれると思います。

レムお姉さまがグレンダンに戻ってくるのを心待ちにしています。

追伸……フェリさん。メイシェンさん。ーナさんに個人的に言いたい事があるので、お手数ですが三人にお手紙を届けてくれる

と嬉しいです。

親愛なるレイムリア・ヴォルフシュティン・サイハーデンへ

レステイーン・アウレストル」

「うん。結局、レンが三人宛てに手紙を書いた理由は解らなかつたね。ま、あとで三人に聞けばいいよね。それにあのレンが他人を不快にする手紙を書く訳ないし」

レイムリアは樂觀的な気分で、手紙を三人に渡した。
渡してしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

レイムリアから渡された、レステイーンの手紙を読んだ。読んで、無表情なフェリが怒りのあまり顔を真っ赤にした。

「・・・・・・・・・・不愉快です!!!!」

フェリはそう言うと、手紙をグシャグシャに丸めると、念威爆雷で塵も残さず爆破した。

だがそれでも気は晴れず、とりあえず帰って来た兄に念威爆雷（威力最小）を喰らわせ少しだけ気分を紛らわせた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

レステイーンの手紙を読んだ、メイシェンは顔を真っ赤に染めていた。

だがその表情は次第に無表情になっていった。

そして無言で、台所に向かって行った。

「ただいま、メイっち！ごはん頂戴……！！？」

帰って来たミイフィは怯えるように台所をのぞきこむナルキに驚愕した。

「……ナツキ。どつたの？」

「……台所を見てみる」

「?……!？」

台所を見たミイフィは驚愕した。メイシエンが料理をしている。

いたって普通なのだが……

「……なんか、怖いよ。メイっちが!!」

「……ああ。まるで、汚染獣みたいだ」

メイシエンは料理をしている。だがメイシエンを包む雰囲気、普段と違っていた。

体に汚染物質を纏っているかのような、どす黒いオーラが漂っている。

幼馴染としてこれまで三人一緒だったが、ここまで怒ったメイシエンを見るのは二人も初めてだった。

「……あ、帰ってただね。待ってて、もうすぐ出来るか

ら……」

メイシエンが笑顔を浮かべながら言うが、

「……物凄く怖いよ。ナツキ!!」

「……私も怖い。一体メイに何があつた？」

その日の夕食、メイシエンは終始笑顔を浮かべていたが、体から放たれるどす黒いオーラの所為で、ミイフィ、ナルキは夕食の味が全く分からなかった。

その日二人は決意する。絶対本気でメイシエンを怒らせないようにしよっ。

「・・・・・・・・・・」

レスティーンの手紙を読んだニーナは数秒ほど、目を閉じて、開いた瞬間、手紙を考えうる限り細かく破いた。

「ふふふ。初めだ。ここまで馬鹿にされたのは。ふふふ」

その日、ニーナのうす笑いに、同じ寮に住む住人は皆、激しくひいたそうだった。

次の日、レイムリアはやたら気合の入ったお弁当を、メイシェンからもらった。

フェリ、ニーナは物凄く気合の入った訓練を行っていた。

レイムリアは物凄く不思議だったが、あえて理由は訊ねなかった。何故かレイムリアの戦場で磨いた勘が告げていたからだ。

聞けば、死を覚悟する必要があると・・・・・・・・

番外編 レステイーンの手紙（後書き）

ハイ。メイシエンを少し、暗黒面に落としてみました。

ほか二人は、まあそれほどでもなかったのですが……

これからの話で、このキレたメイシエンを出した方がいいか少し
悩みます。

出してみるのも面白そうですが……

いつそ、チート改造するのも面白そうです。

そして、メイシエンファンの方、すみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7724y/>

鋼殻のレギオス 天剣を携えし刀姫

2012年1月3日03時10分発行